

2023

한일교류 작문 콘테스트

韓日交流

作文

コンテスト

作品集

エッセイ

日本語エッセイ部門
韓国語エッセイ・中高生部門
韓国語エッセイ・一般部門

川柳・俳句

日本語川柳・俳句部門
韓国語川柳・俳句部門

韓国旅行記

日本語 韓国旅行記部門
韓国語 韓国旅行記部門

〔主催〕 駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院・東京韓国教育院

〔共催〕 駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院

〔協力〕 韓国観光公社、韓国コンテンツ振興院、韓国農水産食品流通公社

2023

한일교류 작문 콘테스트

韓日交流
作文
コンテスト

作品集

〔主催〕 駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院・東京韓国教育院

〔共催〕 駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院

〔協力〕 韓国観光公社、韓国コンテンツ振興院、韓国農水産食品流通公社





実施概要

事業名

韓日交流 作文コンテスト 2023

～皆さんの想いを伝えてみませんか～



【日程】

- 作品募集：2023年4月20日（木）～8月18日（金）
- 審査（1～3次）：2023年8月21日（月）～9月4日（月）
- 審査結果発表：2023年9月8日（金）
- 受賞作品展示：2023年10月5日（木）～16日（月）

【趣旨】

次世代を担う両国の子供から一般の方まで幅広い方々を対象に、互いへの想いを伝え合い、新しい「絆」作りのためのエッセイ、川柳・俳句、韓国旅行記を募集し、表彰する。



【募集部門】 全7部門

<エッセイ>

- 日本語エッセイ部門：中学生から一般の方までが対象
韓国語エッセイ 中高生部門：中学生から高校生までが対象
韓国語エッセイ 一般部門：一般の方が対象

<川柳・俳句>

- 日本語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象
韓国語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象

<韓国旅行記>

- 日本語 韓国旅行記部門：小学生から一般の方まで対象
韓国語 韓国旅行記部門：小学生から一般の方まで対象

【応募規定】

<日本語エッセイ、韓国語エッセイ部門>

- ◇ テーマ（次の中から択一）
- A 「私の好きな韓国文化」（例：韓服、キムチ、韓国語など）
 - B 「私が好きな韓国コンテンツ」（例：K-POP、ドラマ、映画、ゲームなど）
 - C 「私が考える韓日交流」
 - D 「私が考える韓日の未来」

<日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門>

- ◇ テーマ
自由（但し、日本語川柳・俳句部門の場合、韓国または韓国語に関するもの）

<日本語 韓国旅行記部門、韓国語 韓国旅行記部門>

- ◇ テーマ
韓国旅行（韓国旅行中に感じたことや思い出、エピソードなどを各部門の言葉で旅行記にして投稿）

【審査方法】

駐日韓国大使館 韓国文化院内で部門ごとに審査委員が集まり、審査会を開催

【審査員】

- ◇ 日本語エッセイ、日本語 韓国旅行記部門
呉英元（二松学舎大学名誉教授・駐日韓国文化院 世宗学堂長）
桜井泉（朝日新聞記者）
- ◇ 韓国語エッセイ中高生・一般部門、韓国語 韓国旅行記部門
李允希（元東京成徳大学教授）
南潤珍（東京外国語大学教授）
武井一（東京都立日比谷高等学校教員）
- ◇ 日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門
兼若逸之（元東京女子大学教授）
チョ・ヒチョル（日本薬科大学 韓国薬学コース 客員教授）



審査結果 (総応募作数：4,369 作)

日本語 韓国旅行記部門
(応募作数：103 作)

【日本語エッセイ部門】 (応募作数：242 作)

- ◇ 最優秀賞 (1 名)
 - － 久保 ゆり (東京都)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
 - － 寺前 陽葵 (明晴学園中学部)
 - － 林 淳月 (大阪府)
- ◇ 佳作 (4 名)
 - － 崔 厦然 (東京韓国学校)
 - － 宇都宮 陽菜 (愛媛県立宇和高等学校)
 - － 黒田 三枝子 (福岡県)
 - － 今泉 千恵 (茨城県)
- ◇ 入選 (12 名)
 - － 福田 旭 (立教池袋高等学校)
 - － 呉 瑞允 (東京学芸大学附属高等学校)
 - － 森 遥斗 (慶應義塾志木高等学校)
 - － 高橋 恵美 (栃木県)
 - － 西岡 真実 (帝塚山学院大学)
 - － 神宮寺 彩 (東京都)
 - － 池野 宗子 (東京都)
 - － 横井 都美 (東京都)
 - － 中野 浩道 (埼玉県)
 - － 高島 秋秀 (東京都)
 - － 重松 知美 (東京都)
 - － 浪波 智子 (山形県立天童高等学校)
- ◇ 最優秀賞 (1 名)
 - － 弓木 流々 (駒込高等学校)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
 - － 田中 郁美 (北海道)
 - － 小宮 麻衣子 (東京都)
- ◇ 佳作 (4 名)
 - － 長尾 賢一 (北海道)
 - － 田淵 あずさ (兵庫県)
 - － 大橋 鈴々 (獨協大学)
 - － 前岡 冬佳 (晃華学園小学校)
- ◇ 入選 (12 名)
 - － 花見 玲奈 (鹿嶋市立鉢形小学校)
 - － 今吉 鈴 (明晴学園中学部)
 - － 清水 楓 (多摩大学目黒高等学校)
 - － 二瓶 萌子 (東海大学)
 - － 佐藤 禮子 (東京都)
 - － 村田 幸子 (宮崎県)
 - － 田中 俊哉 (長野県)
 - － 江南 仁美 (千葉県)
 - － 堀内 梨絵 (大分県)
 - － 服部 利香 (神奈川県)
 - － 永田 結佳 (学習院女子高等科)
 - － 佐野 すみえ (大阪府)

韓国語 エッセイ 中高生部門 (応募作数：84 作)

- ◇ 最優秀賞 (1 名)
 - 李 東映 (帝塚山学院泉ヶ丘高等学校)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
 - 秋月 璃羽 (N 高等学校)
 - 山本 花音 (京都国際高等学校)
- ◇ 佳作 (4 名)
 - 荒川 さや (滋賀県立国際情報高等学校)
 - 上原 優 (滋賀県立国際情報高等学校)
 - 山里 心 (つくば開成国際高等学校)
 - 久保 直香 (山口県立山口高等学校)
- ◇ 入選 (12 名)
 - 金子 紗樹 (関東国際高等学校)
 - 品川 諭奈 (神田女学園中学校高等学校)
 - 中島 桃 (山形県立天童高等学校)
 - 富田 有菜 (大妻中野高等学校)
 - 藤平 千尋 (東京都立新宿高等学校)
 - 松尾 和音 (長崎県立対馬高等学校)
 - 南 茉希 (智辯学園和歌山高等学校)
 - 赤間 優衣 (千葉市立都賀中学校)
 - 新本 亜日花 (盈進高等学校)
 - 武谷 和音 (兵庫県立長田高等学校)
 - 角 明星 (東京都立三鷹中等教育学校)
 - 阿部 聖伶奈 (神田女学園中学高等学校)

韓国語 エッセイ 一般部門 (応募作数：176 作)

- ◇ 最優秀賞 (1 名)
 - 本間 希実 (新潟大学)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
 - 平井 彩花 (滋賀県)
 - 渋谷 牧子 (東京都)
- ◇ 佳作 (4 名)
 - 立野 望美 (北星学園大学)
 - 諏訪 ななみ (東京成徳大学)
 - 齋藤 みづほ (創価大学)
 - 森 方志 (千葉県)

- ◇ 入選 (12 名)
 - 高塩 悠未 (東海大学)
 - 山極 尊子 (埼玉県)
 - 坪井 京奈 (新潟大学)
 - 大江 千晴 (東京都)
 - 安藤 まり子 (東京都)
 - 森林 奈穂美 (新潟県)
 - 川村 文 (東京都)
 - 田村 香織 (大阪府)
 - 清水 碧 (福岡県)
 - 安部 ひとみ (愛知県)
 - 隅田 もも (筑波大学)
 - 新屋敷 詩乃 (北海商科大学)

韓国語 韓国旅行記部門 (応募作数：115 作)

- ◇ 最優秀賞 (1 名)
 - 弘川 幸乃 (大阪府)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
 - 秋山 由紀 (東京都)
 - 諫山 萌加 (駒澤大学)
- ◇ 佳作 (4 名)
 - 渡辺 由美子 (東京都)
 - 斉 智司 (埼玉県)
 - 永田 伶衣 (大阪府)
 - 中村 慧 (長崎県)
- ◇ 入選 (12 名)
 - 門多 ひかり (愛媛県立宇和島南中等教育学校)
 - 齋藤 ゆあ (関東国際高等学校)
 - 桑原 涼華 (北海商科大学)
 - 永松 寛子 (福岡県)
 - 北野 萌 (帝塚山学院大学)
 - 松浦 あや乃 (帝塚山学院大学)
 - 西島 理子 (帝塚山学院大学)
 - 草野 洋子 (千葉県)
 - 野澤 静子 (兵庫県)
 - 井上 美優 (沖縄県)
 - 石田 小百合 (神奈川県)
 - 淵脇 真優菜 (東京都)

日本語川柳・俳句部門
(応募作数：2,782 作)

- ◇ 最優秀賞 (1 名)
 - － 村田 睦美 (埼玉県)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
 - － 大川 ことの (新潟大学)
 - － 谷川 彩恵 (筑波大学)
- ◇ 佳作 (4 名)
 - － 福田 友理 (東京女子大学)
 - － 李 承炫 (韓国 京畿道)
 - － 北森 大基 (奈良県)
 - － 井上 英治 (東京都)
- ◇ 入選 (12 名)
 - － 月橋 真央 (新潟大学)
 - － 山本 修平 (新潟大学)
 - － 近藤 紀巳 (岐阜県)
 - － 山村 遥 (京都国際高等学校)
 - － 吉田 美香子 (千葉県)
 - － 長屋 侑里鈴 (松本大学)
 - － 館 健一郎 (東京都)
 - － 清水 理恵 (大阪府)
 - － 北野 誠也 (神田外語学院)
 - － 金 泰植 (東京都)
 - － 菅原 花音 (神田外語学院)
 - － 横井 都美 (東京都)

韓国語川柳・俳句部門
(応募作数：867 作)

- ◇ 最優秀賞 (1 名)
 - － 南口 江美 (東京都)
- ◇ 優秀賞 (2 名)
 - － 中島 理帆 (電気通信大学)
 - － 草野 洋子 (千葉県)
- ◇ 佳作 (4 名)
 - － 湯澤 葉子 (東京都)
 - － 高橋 乃愛 (新潟大学)
 - － 檜原 結海 (京都国際高等学校)
 - － 藤野 美保子 (神奈川県)
- ◇ 入選 (12 名)
 - － 轟 舞花 (新潟大学)
 - － 矢田 美咲希 (鳥取県立境高等学校)
 - － 清水 蒼生 (電気通信大学)
 - － 鈴木 花那 (東京女子大学)
 - － 佐々木 成美 (東京女子大学)
 - － ヘイヴン 亜紀 (東京都)
 - － ドウン ジム (鳥取県)
 - － 菊地 爽月 (新潟県立大学)
 - － 石田 幸平 (北海商科大学)
 - － 井上 和恵 (東京都)
 - － 谷川 真菜 (神戸学院大学)
 - － 江崎 定幸 (東京都)

賞

- ◇ 最優秀賞 (各部門 1 名、計 7 名)
 - － 賞状、副賞 (日韓往復旅行券 2 名分、韓国ドラマ DVD セット)
- ◇ 優秀賞 (各部門 2 名、計 14 名)
 - － 賞状、副賞 (日韓往復旅行券 1 名分、韓国ドラマ DVD セット)
- ◇ 佳作 (各部門 4 名、計 28 名)
 - － 賞状、副賞 (Bluetooth スイヤーホン、K-POP CD セット)
- ◇ 入選 (各部門 12 名、計 84 名)
 - － 賞状、副賞 (韓国語教材、K-POP CD セット)



審査評

日本語エッセイ・旅行記部門 審査評

呉英元〔二松学舎大学名誉教授〕

受賞者の皆様にお祝い申し上げます。

地球が痛んで全世界が苦しんでいる世の中で、心休まぬようなどころへ嬉しくも喜ばしい素晴らしい作品を多数お寄せいただき誠に感謝いたします。



日本語エッセイ部門の最優秀賞は、久保ゆりさんの「私の好きな韓国文化／韓国語」。落ち着いた端正な文章を読んでいるうちに、静かな熱い感動が湧いてくるのを感じました。“もやもやした自分の感情を代弁してくれる言葉に出会えたときの感動”、“韓国人の人々との交流のために準備する、希望に溢れた時間”、“他者を家族のように包み込み、愛情を隠さない韓国人の情が新鮮”などの温かい感性に触れながら、「言語学習を通して得た新しい経験を共有したい」と思い日本語教師になった」と。そして「必ず良いことをもたらしてくれと伝えられる教師でありたい」との微笑む和やかな教師の姿が見えるようで良かったです。

韓国旅行記部門の最優秀賞は、弓木流々さんの「40万歩の思い出」。高校2年生のひとり韓国へ留学し、まだ慣れなかったある日、大学近くで屋台のおばちゃんにキンパを頼み、暖かいところへ誘導され、会話をし「つらくなったらいつでもおいで」と温かいスندエを渡してくれました。嬉しい時は帰りに寄っておばちゃんに報告し、難しい韓国語の表現があると教えて貰い、キンパとお茶を出してくれ、話を笑顔で聞いてくれると日本にいる母を連想させ、屋台は心の拠り所となりました。おばちゃんを信じ、積極的に人と会話をして街を歩くようになったら20日間で40万歩を記録され、韓国で出会った方への感謝をしました。

エッセイ部門の優秀賞は、寺前陽葵さんの「ドラマのような韓国文化」。生まれつきの耳が聞こえない私立ろう学校に通っていた「引き込み事案で緊張しやすい女の子」が、韓国の海外研修に行き、ろう者団体の高校生と交流を通して「辛口のおじさん」に出会え、本音で話す韓国人たちと出会い自分から積極的に変化していきます。同じ優秀賞は、林淳月さんの「縫って染めたチマチョゴリ」。大切な友人の結婚式に招待され、自分で生地を染めて縫って自ら着たチマチョゴリを着て式典に行くのが最高のお祝いだと表します。結婚式を祝福する表現が大変情熱的に伝わってくるような感じがしました。佳作は、崔慶然さんの「家族と共にする名節」。家族との絆を強く感じ、名節雰囲気をよく表現された良い文章でした。

韓国旅行記部門の優秀賞は、田中郁美さんの「25440日目に行ったDMZ」。友達と3泊4日で韓国旅行をし、南北境界線DMZ日帰り観光ツアーに申し込みました。境界線に近い臨津閣に到着、ゴンドラに乗り橋の上から川と北の景色を眺めると大きな白い鳥が3羽ほど、北の山に向かって悠々と川を越えて飛んでいったのを見て、「なんとも言えない虚しい気持ちになった」と、第3トンネルを見学し、壁手前の電光掲示板に点灯される休戦からの日数25440カウントのDMZには、胸に言葉が詰まり自然と涙した文章でした。同じ優秀賞は、小宮麻衣子さんの「半世紀前の面影を求めて」。南原にある名勝「広寒楼苑」で、半世紀前の面影を求めて、懐かしい思い出悲喜こもごもの感激を味わうのでした。

日本語エッセイ・旅行記部門 審査評

桜井泉〔ジャーナリスト〕

隣国の人と出会い、語り合おう

コロナ禍の3年余り、韓国旅行や留学をあきらめた人も少なくなかったでしょう。感染への警戒は怠れませんが、韓国旅行も制限がなくなりました。オンライン交流は、非常時の手段に過ぎません。これからますます、韓国を訪れ、隣人とふれあう機会をつくってください。うれしいことに、今年作品応募は昨年を大きく上回りました。



私の審査基準は、読む人に感動を与える内容であることです。人との出会いや交流が生き生きと、そして自分の気持ちが素直に書かれていることが大事です。BTSをはじめ、韓流が大ブレイクしていますが、自分の「推し」をただ書くだけではなく、そこから韓国の文化や歴史への関心や理解がどう広がったのか。そんなことまで具体的に書いてほしいと思います。

日本語エッセイ部門の最優秀賞は、日本語教師の久保ゆりさんの「私の好きな韓国文化／韓国語」。コロナ禍で家にこもる日々でしたが、心を動かされた韓国語の言葉を書き留め、韓国語で日記を書いたそうです。それは、交流のための準備であり、「希望にあふれた時間」でした。前向きな姿勢がいいですね。

優秀賞は中学3年生の寺前陽葵さんの「ドラマのような韓国文化」です。耳が聞こえない寺前さんが、学校の研修で済州島に行き、ろう者の高校生と交流しました。もともと引っ込み思案だったそうですが、「本音で話す韓国人たちと出会って、私も積極的になろうと決めました」。来春からは高校生、研修の成果を生かして爽り多い生活を送ってください。

もう一つの優秀賞は林淳月さんの「縫って染めたチマチョゴリ」。自分でチマチョゴリを縫い上げ、チマを小豆で染めて、友人の結婚式に出たそうです。「底知れないエネルギーはどこから来たのだろうか」。やはり民族への熱い思いからなのではないでしょうか。

日本語旅行記部門の最優秀賞は、高校3年生の弓木流々さんの「40万歩の思い出」。「いったい何だろう」と思わせるタイトルが素敵です。2年生の冬の韓国留学。屋台のおばちゃんと仲良くなり、韓国語も教えてもらいました。スندエをおまけにくれ、まるでお母さんのよう。会話の楽しさを知り、積極的に街を歩くようになりました。1日2万歩で20日間、すてきな人たちに会い、全く孤独を感じなかったそうです。これこそ、留学の成果です。

優秀賞は、小宮麻衣子さんの「半世紀前の面影を求めて」。自らのルーツがある全羅北道・南原を半世紀ぶりに再訪しました。「香春伝」の舞台でもある、「ふるさと」は去りがたいものでした。

もう1点の優秀賞は、田中郁美さんの「25440日目に行ったDMZ」。DMZとは南北を分かつ非武装地帯のこと。北朝鮮と向き合う韓国の厳しい現実を感じた旅でした。「もう単なるKPOPの消費者ではいられない」という結びの言葉がいいですね。

来年も韓国の人とのふれあいを感じられる作品を待っています。



審査評

韓国語エッセイ・旅行記部門 審査評

李允希 [元東京成徳大学教授]

「今年の応募数も昨年の記録を上回りました！」

韓国文化院から待ちに待ったお知らせが届きました。今年は日韓関係も良い方向に動いているので内心応募数が増えることを期待していましたが、実際に大幅に増えたお知らせが届くとやはり嬉しく思いました。まずは作品を送ってくださった皆様に感謝申し上げます。



近年は若い世代の応募がたいへん増えているので、作文に登場するテーマや内容も新しい視線や考えで綴られていることが多く、たいへん勉強になります。過去の自分との対話や伝統的な遊び道具との対話というユニークな形式で書かれた新鮮な文もあり、一作一作を読むのに興味津々でした。また、コロナ禍で留学をした方々の減多にできない貴重な経験が切実に綴られた作品もあり、その苦勞と勇氣には只々感服しました。韓国の文学をテーマに綴られた作品が多くなり、また韓国語の固有語についても関心を持つ方がいらっしゃるほど韓国語の学習のレベルも高くなってきていますので、これからも素晴らしい作品が増えることを期待したいと思います。

審査においては、今年も美しい表現で綴られている作品に注目しながら読ませていただきました。

韓国語エッセイの学生部門では、韓国の詩の温かさをたとえる表現が素晴らしい、何度も読み返しながらエッセイ執筆者の文学的なセンスの高さに驚いておりました。友人と情緒豊かな韓国の詩文学の翻訳を通じて、日韓の銀河に鳥鵲橋(天の川の橋)を架ける鳥と鵲になりたく、就寝前の1分の詩を堪能していることが高い表現力を生んでいるのですね！

韓国語エッセイの一般部門では、**윝놀이**(ユンノリ)という伝統遊びをテーマに人生を語るというユニークで斬新な作文が素晴らしいかったです。ゲームのルールの一つの**뒷도**(後ろのド)が**백도**(バックのド)と使われているのは、時代に沿って伝統遊びもグローバル化を迎えているのですね！

旅行記部門の最優秀賞の作文を読んだときには、雷に打たれた気がしました。これほどハンシク(韓食)が簡略かつ適切なことばで表現されたことは他になく、まさに韓食の定義そのものでした。ヒーリングフードであり、ヘルスフードであり、カルチャーフードなのですね！

今回読ませていただいた作文の中にも素晴らしい韓国語の表現がたくさんございました。中でも'**고운 한국어**(ゴウン韓国語)'という表現は美しく、私の宝となりました。本当にありがとうございました。

韓国語エッセイ・旅行記部門 審査評

南潤珍 [東京外国語大学教授]

昨年に続き韓国語のエッセイ部門(一般・中高生)と韓国旅行記部門の審査をさせていただきました。今年度の応募作も内容面、文章の構成において完成度の高いものが多かったため入賞作を選ぶのに一苦労でしたが、多様なテーマと斬新な構成の優れた作品に触れる楽しい時間を過ごすことができたことに感謝いたします。



選考の過程で私のもっとも重点をおいたのは、与えられたテーマを自分の経験、伝えたいキーワードと上手く結びつけることでした。

韓国語エッセイ部門のテーマは、「私の好きな韓国文化・韓国コンテンツ、私の考える日韓交流、日韓の未来」でした。比較的身近なテーマともいえる「私の好きな韓国文化・コンテンツ」はもちろんのこと、抽象的になりやすい「日韓交流・日韓の未来」においても実体験に基づいた意見や作者の個性が現れた作品が例年より増えたと思います。韓国語力だけでなく、韓国体験や交流を通じて深まった異文化・国際交流に対する認識に基づいた作品の数々だったと思います。

中高生部門の最優秀賞に選ばれた作品は、韓国の有名な詩と自分の名前を結びつけて自分の将来の夢の中で日韓交流を実現することを述べた作品であり、上で述べた、抽象的なテーマを自分のことばで紐解いて具体化した点で審査委員から高い評価を得ました。

一般部門では、自分の好きな韓国文化やコンテンツに関するものが多かったのは例年と同じですが、その題材がラーメンや絵本のような具体的な物からユンノリ(윝놀이)や人間関係のような抽象的なものまで多岐にわたっておりました。また、単に出来ことを述べるだけではなく、その経験を通じて感じたことやその意味を深く吟味し、今の自分につなげようとする姿勢が垣間見える作品が多かったのが印象的でした。

韓国旅行記部門は、昨年度を大きく上回る作品が寄せられ、コロナ禍以来の状況変化を肌で感じることができました。内容においては、単に旅行日程を説明するだけではなく、旅行を通じて感じたことや分かったことを綴った、完成度の高い応募作が多かったので楽しく読ませていただきました。その一方、作品の中には、「旅行記よりはエッセイ部門に出されたらより高く評価されたはずなのに」と思われるものもありました。あくまでも旅行記ですので、まずは旅行の様子が分かる内容が望ましいと思います。来年度の応募に向けて、ご参考にしていただければ幸いです。そんな中、最優秀賞・優秀賞に選ばれた作品は、旅程の全体像とその中で経験したこと、感じたこと、思ったことが良く織り交ざって旅行記のよき手本になっていると思いました。

以上、感じるままを記しておきました。これからも韓国・韓国語との出会いを通じて良い思い出、新しい発見が増えることを期待します。ありがとうございます。



審査評

韓国語エッセイ・旅行記部門 審査評

武井一〔東京都立日比谷高等学校教員〕

審査を終えて

作文コンテストの応募作を今年度も楽しく拝読しました。母語でない言語で作文を書いて、コンテストに応募するという事は、それだけで素晴らしいことです。

印象的だったことは、「韓国語エッセイ中高生部門」の内容が昨年度に比べて飛躍的に向上したということです。自分しかできない経験、気づきを書き、かつ構成もしっかりしたものが多かったのです。「韓国語エッセイ一般部門」も3年前の自分に声をかけるものなど、楽しく読める作品が多くありました。

ただ、両部門とも、「私が考える韓日交流」は、抽象的なイメージで書いた作品が多かったように思います。その中で入賞した作品には詩を題材にしたもの（中高生部門）、絵本作成を通じての交流（一般部門）など、自分の関心のある具体的なものと交流を関連付けたものが印象深かったです。なお、詩を題材にして入選したものはいずれも中高生部門の作品でした。これまで詩を取り上げたものは多くなかったのですが、今回の2点は、今後に向けて新しい視点、主題の可能性が感じられるものでした。

「韓国旅行記」は、3年ぶりに韓国に行けた喜びが感じられました。テジクカップについて筆者ならではの新しい価値を発見したものの、訪韓した母親がこれをきっかけに大きく変わったことなど、自分の観点から旅行で得たものを書いたものが面白かったです。

全体を読んだ印象ですが、まず題材の設定が大切と感じました。具体的な題材に絞って書いたものの方が言いたいことがはっきりと伝わっていました。自分の語りたいことや経験をたくさん書いたものもあったのですが、残念ながら焦点がぼけてしまい、伝えたいことが伝わりにくくなっていました。

次に重要なことは起承転結などの構成がしっかりしていることです。特に書き出し部分です。ここが魅力的な作品の多くは、最後まで興味深く読むことが出来ました。さらに平易な言葉で書いたものの方が、難しい言葉で書くよりも伝えたいことが伝わりました。作文は他人に読んでもらうものです。伝えるための工夫が必要だと思います。

作文をするときに色々なものを調べたり参照したりしたと思います。その結果、韓国語としては使わない単語や言い回しを書いてしまうこともあったと思います。文の流れに関係なく突然詩的な表現になったり、適切でない単語が使われたりするものが多くありました。特に副詞の場合は意味が意図するものとは逆になってしまうこともあります。このようなことから、自力で書いた文章は、一度韓国語のネイティブに見てもらおうと良いと思います。このことは、韓国語の力が一層伸びることに繋がります。機会があれば、ぜひ、また応募してみませんか。さらなる飛躍のために。



日本語川柳・俳句部門 審査評

兼若逸之〔元東京女子大学教授〕

世界的な異常気象がもたらしたのでしょうか、今年の暑さは耐え難いものでした。韓国でも「폭염(暴炎) 주의보(注意報)」が何度も出されています。暑い時の食べ物の代表といえは、「以熱治熱(이열치열)：熱をもって熱を治める」を実感させる「蔘鷄湯(삼계탕)：サムゲタン」や食べながら体を冷ましてくれるパピンスやコングクスなども好まれます。

「猛暑日の今日も癒しのコングクス」(福田友理さん：佳作)は酷暑の中、コングクスのありがたさを詠んだ句です。パピンスが早くとけてしまうのに対してコングクスは豆乳と麺が絡み合っていて、しかも食べ終わるまで冷たいままで味わえます。今年の夏の暑さに負けそうな体をコングクスが救ってくれたという経験をしたのでしょうか。

今年はコロナの流行が収まり、海外旅行ができるようになりました。実際に韓国に行って作ったと思われる句がたくさんあったのも嬉しい限りです。「愛想無い接客に感じる懐かしさ」(李承炫さん：佳作)は久しぶりの韓国に懐かしさを覚えた感動を詠った句です。昨今の俳句ブーム流の批評からすれば「感じる」は要らないとか「愛想なき」がいいとか、散文的過ぎるという批判があるかもしれませんが、日本での「愛想のよさ」になにか違和感をもって過ごしていた日常をふと振り返る契機となったのでしょうか。お客様扱いをされない感覚を作者は数年ぶりに感じ、その温かさの中にいる喜びを味わっているようです。

コロナ禍の中で韓国ドラマにはまったという句もたくさんありました。「韓ドラで同志に変わる親子かな」(谷川彩恵さん：優秀賞)の句は家庭内の人間関係や力関係の変化を「韓ドラ」のように楽しんでいるのでしょうか。また、ソウルの観光名所でもある北村(북촌)、南山(남산)、曹溪寺(조계사)、仁寺洞(인사동)などを舞台にした「風磬(풍경)」というドラマも人気だったようです。「風磬」とは「風鈴：ふうりん」のことで、軒先やお寺などに吊り下げられ、その下には魚が風に揺れています。「風磬の音の波間を泳ぐフナ」(大川ことさん：優秀賞)は風鈴の音の響きを川の流れるに見立てて魚の泳ぐ様を詠んだ句です。実際に音が聞こえなくても吊り下げられた魚が動いているのを見ると、風鈴の音が聞こえるように思ってしまう。作者が「風磬」というドラマを見たのか、あるいは北村か曹溪寺で軒下の風鈴を何と呼ぶのかと尋ねたのか、どちらかであろうと推察していますが、構図もよく、清涼感の感じられる句となっています。

「時を超え蓮の花咲くプヨの池」(村田睦美さん：最優秀賞)の句の「プヨの池」とはおそらく百濟の都「扶餘(부여)」の「宮南池(궁남지)」のことで、この池は蓮の花でとりわけ有名です。百濟の時代からの蓮の花が幾度もむわたる戦禍を乗り越え、今日に至るまで生き続けていることは奇跡といっているのでしょうか。

平和な世界を祈りつつ、次年度にも多くの作品が寄せられることを願っています。





審査評

韓国語川柳・俳句部門 審査評

チョ・ヒチョル [日本薬科大学 韓国薬学コース 客員教授]

今年の川柳・俳句の作品は去年より増えて、「韓国語川柳・俳句部門」にも 867 作品の応募がありました。今年も例年と同じく、とてもユニークな作品が多く、皆さんの熱気が伝わってくるようでした。



今年、「最優秀賞」に選ばれた作品は、南口江美さんの
나랑 사귄래? 드라마의 대사에 끄덕이는 나
(僕と付き合う? ドラマのセリフにうなづく私)
でした。この作品は、韓国ドラマに夢中になってドラマの登場人物に自分を重ねたのでしょ。

また、「優秀賞」はまず、中島理帆さんの
눈높이 올려 자막 없이 보려는 한류 드라마
(目線をあげて、字幕なしで見ようとする 韓流ドラマ)
という作品です。

ドラマの字幕はいつでも画面の下段に出ているので、韓国語の実力を伸ばすためにあえて字幕を見ないように頑張る姿が目につきました。

もう一つの「優秀賞」は、草野洋子さんの
여름 소나기 물이 세는 원두막 덧없는 사랑
(夏の夕立 雨漏りの番小屋 はかない恋)
は、韓国人なら誰もが知っている黄順元さんの小説「소나기 (夕立)」をイメージされた作品でしょう。

急に降り出した소나기에、少年と少女が雨宿りのため、番小屋の「원두막 (圓頭幕)」に身を寄せ合う情景が浮かびました。

佳作は 4 作品で、今回は俳句的なものが 2 作品、川柳的なものが 2 作品ずつ選ばれましたが、俳句的な作品としては湯澤葉子さんの「동백야 나랑 바다에서 놀자고 우는 갈매기 (椿よ私と 海で遊ぼうと 鳴くカモメ)」、藤野美保子さんの「많은 밑반찬 냉장고 안에 담긴 엄마의 사랑 (多くの常備菜 冷蔵庫の中に詰まった 母の愛)」、また、川柳的な作品としては、高橋乃愛さんの「“여기 카페네.” 10 미터 걸으면 “여기도 카페!” (“ここカフェね” 10 メートル歩くと “ここもカフェ!”)」、檜原結海さんの「4 교시 수업 포르륵 소리 나서 숨기고 싶어 (4限の授業 ぐうと音が鳴り 隠したい)」は、若い人の感性が活かされたとても面白い作品だと思います。

他方、「入選」も 12 作品が選ばれましたが、他に受賞を逃した作品の中でも立派なものがありました。

皆さんが寄せた下さった作品を読ませていただくことはとてもうれしいことですが、片やつらいことでもあります。それはみなさんの作品に優劣をつけなければならぬためです。

残念ながら今回入賞できなかった方も懲りずにまた、来年の大会に奮って応募してみてください。화이팅!

< 作品の日本語訳はいずれも評者による >

作品集



最優秀賞

私の好きな韓国文化 / 韓国語

久保 ゆり [東京都]

大学に入学し、ハングルが読めるようになりたいという理由で、韓国語の授業を選択した。韓国人の先生は忍耐強く丁寧に教えてくださった。一文話せただけで褒めてくださったおかげで、自信を持てた。私は韓国語が好きになり、自分の言葉で韓国人の人々と交流できるようになりたいと思った。人と交流するための手段として韓国語を教えてくださった先生にとっても感謝している。

大学生活の半分はコロナ渦に見舞われ、家にこもる鬱々とした日々が続いた。体調が悪ければ薬を飲むように、心が辛いときは良い言葉に触れた。韓国のドラマや映画、音楽や書籍にたくさん触れた。心を動かされた言葉をノートに書き留め、韓国語で日記を書いた。もやもやした自分の感情を代弁してくれる言葉に出会えたときの感動は大きい。韓国語を覚えることは、自分の心を表現する新しい方法を学ぶことでもあった。

家で言語学習に一人で取り組む日々は、はたから見ると閉鎖的だったかもしれない。しかしその時間は、いつか出会えるだろう韓国人の人々との交流のために準備をする、希望に溢れた時間だった。

韓国語では「私たちの(우리)」という表現をよく使う。韓国人の友だちが「私たちのゆりに」と書いた手紙を添えたプレゼントを私にくれるとき、私は相手に大切にされているという安心感を抱いた。親しい仲でも距離を保つ日本文化に慣れていない私は、他者を家族のように包み込み、愛情を隠さない韓国人の情が新鮮だった。

国民性と言語は深く関係する。日本人は親切で思慮深い、自分の言葉に強さが宿ることを避け、言葉に含みを持たせる。それに対して韓国人は、自分の感情をシンプルに伝える。そんな韓国語の真っすぐさに惹かれた。遠まわしな表現が多い私も、韓国語で話すときは少し堂々としていられる。

「私も言語学習を通して得た新しい経験を共有したい」と思い、日本語教師になった。日本語学習に対する想いは十人十色だ。日韓関係の研究を志し、韓国で築いたキャリアを捨てて日本に来た者。自動車などの日本の技術を韓国に広めたい者。このように確かな目的を持って日本語を学習する人もいれば、進学や就職のために義務的にする人も多い。

異なる国の人々と交流するとき、言語スキルは欠かせない。従って、言語学習は義務的な面を持つだろう。しかし、その言語に心を動かされた経験、その言語を介した良い出会いがあれば、言語学習は義務ではなく、好きだからするものになる。

私はこれからも多くの日本語学習者に会う。そんなときは、私に自信と希望を持たせてくれた韓国人の人々の顔を思い出す。一生懸命身に着けた言語は、必ず良いことをもたらしてくれると伝えられる教師でありたい。

もちろん私の韓国語の探求も、まだまだ続く。

優秀賞

ドラマのような韓国文化

寺前 陽葵 [明晴学園中学部]

私が好きな韓国文化は「辛口のおじさん」です。韓国ドラマで、ヒロインに辛口の意見を言うけれど、根はいい人で最後は味方になってくれて、ドラマを盛り上げる脇役の「辛口のおじさん」です。私は韓国ドラマが大好きで、これまでに34作品も観ています。そんな私が、今年の7月、韓国に行くことになりました。そして、本音で話す「辛口のおじさん」に出会ったのです。

私は生まれつき耳が聞こえません。明晴学園という日本で一つだけの手話で学べる私立ろう学校に通っています。その学校の中学部の海外研修先が韓国でした。羽田から飛行機で韓国のソウルに着き、そこからチェジュ島行きの飛行機に乗り継ぐためのバスに乗ったときのことです。みんなと同じように荷物を椅子の間に入れようとする、キャリーケースが大きすぎて入りません。『どうしよう。恥ずかしい』とあせっていたとき、近くの席に座っていた見知らぬ韓国人の女の人が近づいて来て、手早く、少しあわただしく私のキャリーケースを椅子の下に入れてくれたのです。突然のことに私は、お礼を伝えることもできませんでした。私は引っ込み思案で緊張しやすい女の子なんです。

翌日は、ろう者の団体「ソボサ」の高校生と交流しました。私たちの会話は、韓国手話と身振りです。手話は国によって違うので、韓国に行く前に少し韓国手話を勉強しました。おかげでソボサの高校生の話は、だいたい理解することができました。交流企画で四輪バギーに乗ることになり、ドキドキしながらスタッフの説明を聞いて練習を始めたのですが、うまく走ることができず転んでしまいました。みんな心配してくれるだろうと思って顔を上げると、近くにいた男性スタッフは、『信じられない』『だめだこりゃ』というようなオーバーな表情をして、腕でバッテン！をしたのです。『えっ、痛くて泣きたい気分なのに』とショックでした。でも、落ち着いてみると「あ。ドラマで見たヒロインと辛口のおじさんみたいな感じだ」と気づいたのです。なんと私は、大好きな「辛口のおじさん」と出会うことができたのです。

韓国での体験はどれもとても刺激的でした。来年3月、私は15年間通っている明晴学園を卒業し、高校に進学します。生まれてからずっと手話がある環境が当たり前でした。初めてそうではない世界に出るので、今からとても不安です。先生は「もっと自分から積極的に動きなさい」と言いますが、これまで自分の性格を変えようと思ったことはありませんでした。でも、遠慮せず行動し、本音で話す韓国人たちと出会って、私も積極的になろうと決めました。韓国の「辛口のおじさん」に、あのとき言えなかった「ありがとう」を言いたいです。

優秀賞

縫って染めたチマチョゴリ

林 淳月〔大阪府〕

“チマチョゴリを縫わなくては！”

ある日、唐突にそんな思いが込み上げてきた。まるで心の奥底に降り積もった潜在意識から、鯨が海面に姿を現し、潮を吹いたかのような、劇的に現れた感情だった。

初めに、生野図書館で韓服の作り方が書かれた本を借りて、辞典を引き、図を見ながら解説した。それから毎晩縫った。祖母と母がかつて縫製の内職をしていたから、自宅に工業用ミシンや裁縫道具があり、難しいところは母に相談できた。数週間集中して、チマチョゴリは仕上がった。ところが着る機会がなく、押し入れの中で眠ったままだった。

一年後、沖縄の大学時代の大切な友人から、結婚式に招待された。あのチマチョゴリを着ていこうと浮足立った。生地が白いままでは花嫁衣装と重なってしまうため、上衣を蓬で、チマを小豆で染めることにした。職場の広い台所で大きな鍋を借りて染めた。大学時代に、隣の校舎で工芸専攻の学生たちが、沖縄の染織を学びながら自らも作る静かな熱意を、そばで感じていたことを思い出した。

やがて、淡い色合いに染め上がった。綿の生地には色は入りにくいのか、鮮やかには染まらなかった。が、私の心は満たされていた。上司が「素敵だね」と褒めてくれた。“自分で縫って染めたものを着ていくのが、私なりのお祝いの表現なんです。”結婚式前夜、夜行バスに乗るため家を出るとき、玄関で叔父が私を止めた。「みんなきれいなちゃんとしたチョゴリを着ていくのに。そのチョゴリはやめとき。恥かくで。」皆はオーガンジーのつやつやした生地に鮮やかな色合いのものを着てくたろうに、私が作ったのは綿だし薄い色合いだし、野暮ったくて場にそぐわない、と考えたのだろう。私を心配しての発言だった。でも私は押し切って走り出した。友人に会える喜びや、祝福する気持ちを抱きしめて、そして叔父の言った不安を振り払うかのように、勢いよく夜道を駆けていった。

沖縄で一回目が催され、東京で二回目の結婚式だった。隣の席に座った友人が「とても素敵だね」と言ってくれた。私は、猛烈な思いで縫ったこと、お祝いの気持ちで染めたこと、叔父に言われたこと、それでも着たことをひとつひとつ話した。隣の友人はじっと耳を傾けて、言った。「私は沖縄でも式に出席して、東京に来てなんで二回も出席するのかと思っていたけれど、淳月さんのチマチョゴリを見るために今日ここに来ただとわかった。」

後日、花婿である友人からメールをもらった。「淳月さんのチマチョゴリはとても懐かしい感じがしました。実は、淳月さんたちの後ろに染織家の先生が座っていて、あなたたちのお話が聞こえてきたそうです。先生はうなずきながら感心していた、と伺いましたよ。」

体裁よりも心を込めることが大事だと自分を信じ行動できて、さらに思いが通じて嬉しかった。それにしてもあの、チマチョゴリを仕上げた底知れないエネルギーはどこから来たのだろうか。

佳作

家族と共にする温かい名節

崔 厦然 [東京韓国学校]

「おばあちゃん、叔母さん、お姉さん、お兄ちゃん～！また会いに行きます！」

私は韓国出身でありながら、幼少期から日本での生活を送ってきました。忙しさに追われる日々もあるけれど、長期休暇が近づくといつも楽しみにしていることがあります。それは、韓国の祖母の家で親戚たちと集まる、温かな名節のひとつです。やはり、日本での生活に慣れても、韓国にいる親戚の温かい歓迎はいつも心に残ります。

韓国にいる親戚は、私が日本で生活しているという距離感を感じさせません。むしろ遠く離れている私を懐かしみ、いつも私を迎えに来てくれます。飛行機から降りた瞬間から親戚の笑い声と明るい笑顔が「ハヨン、また背が伸びたね」「もうずいぶん大きくなったね」という言葉と共に私を迎えてくれます。その瞬間、物理的に遠く離れていたことを忘れて、家族との絆を強く感じます。

名節は私にとって特別な日です。朝、起きると台所から、揚げる音、リズムカルに包丁で切っている音、炒めている音が、胃を刺激するいい匂いと共に流れてきます。テーブルの上にはカルビチム、焼き魚、トングランテン、ナムル、チヂミなど様々な食べ物がテーブルの脚が折れるほど並んでいます。食事の時間は、会話と笑いが交わる貴重な瞬間です。なぜなら、私を含め、生きるのに忙しい現代人たちは普段、多くの会話をする時間があまりないからです。しかし、この時ばかりは、現代人の多忙な日常から解放され、一緒に食卓を囲みながら話したかった話を交わします。そして、その暖かい雰囲気にも包まれます。

食事が終わった後、久しぶりに集まった親戚たちと民俗遊びを楽しみます。ユンノリは皆、互いに自分達が勝つと声を張り上げ、「モだ！」「ケだ！」と声を張り上げます。時には大人も子供のように見えます。また、みんなで小さな輪を作って色とりどりのコンギを手にとって投げます。時には失敗もしますが、それも笑い飛ばします。笑顔が絶えず楽しさが私たちの顔に輝いています。

韓国の文化は家族との絆と温かさで満ちています。遠く離れて暮らす私でも、名節の時にはその温もりを感じることができるとは幸せです。そして、私の心には親戚との素敵な思い出が詰まっています。

佳作

私が出会った韓国エッセイ本

宇都宮 陽菜 [愛媛県立宇和高等学校]

私にとって大事な存在だから。と言うものの1つに「すべての瞬間が君だった」というハ・テワンさんの本がある。この本を一言で表すと、「絆創膏」なぜかって、この本の言葉一つ一つが傷ついた私の心を癒してくれるから。

日々生きていく中で、楽しい日も、嬉しい日も、なくなって欲しいけれど悲しい日も、辛い日もある。楽しい日は時間があっという間に過ぎていくのに、なぜか辛い日には時間がゆっくりと進んでいるように感じる。そんな時私は、慰めて欲しいといつも思う。答えを探して欲しいわけでも、提案して欲しいわけでもなく、ただ、頑張ったね。辛かったね。大丈夫だよ。とその救いの一言が聞きたい。

そんな時この本を読むと、温かい言葉たちが私を慰めてくれる。正解がわからなくても、辛くても、少し心を軽くしてくれて、苦しいけど、明日は美味しいものでも食べようかな。出かけようかな。と私の明日を作ってくれる。明日は絶対に幸せとか、明日にはきっと解決するなんてことはわからないけれど、それでも少し心が軽くなることで、「生きよう」って思える。

私は最近、本を読んで生活していく中で、大切なことに気づかされました。それは自分自身を大切にすること。時には1人で散歩に出かけたり、好きな人に会いに行ったり、料理を作ってみたり。そうやって自分に時間をあげて、日々の疲れを癒す時間を自分で作る。子供がいたとしても、仕事が忙しくても、少し悪いか。って思いながらも預けたり休みながら、少しの時間でも何も考えずにただ楽しむ。それが1つの大事な生きる意味になると思う。人生は誰のものでもない自分だけの宝ものだから。

自分が幸せになることで、周りの人たちも幸せにすることができる。だからまず自分が幸せになって大切な人たちに愛情を注ぎたい。

こうやって日々私の心に寄り添ってくれる本に出会えたことが本当に嬉しい。私は本当にこの本が大好きです。韓国には本当に美しいものが沢山あります。いつか私も韓国へ行きたいです。

佳作

芽・茎・そして花を

黒田 三枝子〔福岡県〕

「筑紫の君 磐井の乱、知っていますか？」

「では、白村江の戦いは？」

これらは、ある高校に韓国語学習のゲストティーチャーとして授業をした私からの質問である。高校二年生のほとんどは、記憶に無いという反応だった。例え「磐井の乱」は知らなくても、「白村江の戦」は小中学校で習っているのではないかと、私は教職にあった当時、社会科は「歴史から学ぶ」という姿勢で指導した。私の住む福岡県では、この戦いは無関係ではない。大和朝廷は国を守るため城や土塁を築き、その姿は現在も見ることができる。それ故に、古代朝鮮半島とのつながりを、よく知らない生徒に驚くと同時に、韓国についての学習の必要性を痛感し～韓日交流の起点は、まさにここ、即、韓国学習への意欲化ではないのか？～と、考えるに至った。

ノーベル物理学受賞の朝永振一郎博士は、「不思議だと思うこと これが科学の芽です。よく観察して確かめ そして考えること これが科学の茎です。そうして最後に謎が解ける これが科学の花です。」と語っている。まさに「私の考える韓日交流」の過程だ。

生徒が「韓国語学習」を選択した理由～その動機の多くは「K ポップが好き」「韓国への興味関心」「面白そうだから」「韓国について知りたくて」などである。これらの動機は、「韓日交流」の意欲化につながる「芽」といえる。そして、日本の「歴史教育」の徹底を待つまでもなく、古代から現在に至るまでの両国の歩みや文化・政治・経済等々を自ら学び、考え認識することが韓日交流の「茎」で、最後には、よりよい関係を築き、充実した韓日交流を体現化するという「花」を咲かせることにつながると、私は考える。

先の高校での体験は、私に徒労感と疑問しか残さなかった。たった50分間のパワーポイントを用いた講話は生徒の役に立ったのか？と。後日、担当の先生から頂いた生徒のアンケートを読み、自分がいかに傲慢だったか、反省させられた。実は、私の講話も生徒には「芽」だったのである。生徒のアンケートには、○韓国のことがもっと知りたくなった。○韓国とのつながりが聖徳太子の時代より前からあって驚いた。○韓国と日本をすごく近く感じた。○韓国と日本のつながりについてしっかり知ることができてよかった。もっと韓国について知りたい。○もっと日本と韓国のつながりや、韓国の文化について知りたい。

このようなアンケートの感想を読みながら、つくづく貴重な経験をさせてもらったことと、私自身が実際に、韓国の人々と「草の根交流」をすることもできない状況であっても「私の考える韓日交流」の「芽」の役になれたことに感謝し、いつか生徒たちが韓日交流の花を咲かせてくれることを楽しみにしている現在である。

佳作

ワクワクしてきた！～私が考える韓日交流～

今泉 千恵 [茨城県]

今年の夏、中2の娘が韓国に行った。我が家は特に韓国に興味があったわけではない。娘本人も、K-popにも韓国コスメにも全く興味はない。市の中学生交流事業というチラシを見た娘の「海外に行ってみたい」という軽い一言から、これまた軽い気持ちで送り出したのだ。

最初の2日は韓国の中学生と交流し、3日目はなんと、初対面の韓国人宅へ宿泊させてもらうという、ドキドキのスケジュールだ。食事は？言葉は？病気になったら？心配つきない旅の始まりである。市担当者のマメなフォローで、現地の様子がちょくちょく画像配信されてくる。画面の娘は楽しそうで少し安心しつつ、いよいよ最終日のホームステイだ。

ステイ先は一般家庭で、付き添いはいない。どんな家族なのか、会話は通じるのか、もう心配でたまらない。娘よ、携帯もWi-Fiも渡したではないか、LINE忘れたのか？なぜ一言ぐらい連絡をよこさない？ああもう、お母さん、心配すぎる…と一人悶絶していたその時、メールが届いた。Photos with yeonwoo's family.

たくさんの画像と笑顔の娘。なんと、おそらくこちらが心配していると予想した先方ファミリーが、わざわざメールで送ってくれたのであった。その画像からは、「日本にいる家族へ、彼女は楽しんでいるよ。心配しないで大丈夫だよ」という韓国の家族のメッセージが強く伝わってきて、涙が出そうになった。

翌日、娘はニコニコで帰国した。初めての海外で充実した体験をしてきたことが、一目で分かる満面の笑顔。帰国後の第一声は「すごく楽しかった！韓国にまた行きたい！」であった。

娘から話を聞くと、驚いたことに、先方は、自分の子の部屋を娘のために開けてくれ、我が子はパパママと一緒にリビングに寝たという。なんとという丁寧なおもてなし…大切に歓迎してくれたことが、よく分かる。お土産にと、せんべい1キロパックまで持たせてくれて、娘本人のみならず、我々家族への心配りまでしてくれた。もう親として感服である。別に勝負はしていないが、気配りの面でも完敗だ。

その後、つたない英語を駆使し、何とかthank you so kindとハートとニコニコマークの絵文字で返信したが、この感謝の気持ちと感服の念を、韓国語で伝えられないことが、本当にもどかしい。

私は決めた。来年の交流事業で、今度は韓国からヨヌちゃんが来日し、彼女は我が家に1泊する。だから、それまでに、韓国語をマスターするのだ！そして、彼女が日本にいるあいだ、彼女の家族へ、韓国語で「韓国にいるヨヌの家族へ、彼女は楽しんでいるよ。心配しないで大丈夫だよ」とメッセージを送るのだ！

韓国という国にも、ハングル語にも、今まで何の興味もなかったのに、突然こんな熱い存在になるなんて…。今から1年後の交流に向けて、ああ、ワクワクしてきた！

最優秀賞

40万歩の思い出

弓木 流々 [駒込高等学校]

2023年高校2年生の冬、私はひとり韓国へ留学した。まだ韓国での生活に慣れていなかったある日、大学の近くにある屋台でキンパを頼んだ。屋台のおばちゃんは「寒いから中に入りなさい。」と暖かいところへ誘導してくれ、拙い韓国語で話す私の話を聞き取り一生懸命会話をしてくれた。そして「つらくなったらいつでもおいで。」とおまけに温かいスンドゥを渡してくれたのだった。初めて食べたスンドゥはおばちゃんの優しさで熱々だった。

それからというもの、嬉しいことがあると大学帰りに屋台に寄っておばちゃんに報告し、難しい韓国語の表現があるとまた屋台に寄って韓国語を教えて貰った。いつもキンパと温かいお茶を出してくれ、私の話を笑顔で聞いてくれるおばちゃんは日本にいる母を連想させ、屋台は私の心の拠り所となった。韓国での生活に慣れてきたとき、日本人であることを気にして消極的になっていることを告白するとおばちゃんは私に「自信を持って堂々とたくさんの人に話しかけなさい。」と言った。

私は屋台のおばちゃんの言葉を信じて、弘大、東大門、明洞などさまざまな土地に足を運び、たくさんの人と会話した。その中で私が日本人だと話しても差別されたり、偏見の目を向けられたことは1度もなかった。むしろ「日本行ったことあるよ!」とか「日本語少しできるよ!」とか、日本の話をしながら明るく接してくれた韓国の人々を見て、偏見を抱いているのは私自身だったのだと気付かされた。

それに気が付いてからは会話をする楽しさを知り、もっと多くの人と交流するため時間さえあれば積極的に街を歩くようになった。さまざまな土地に足を運び、そこで出会った人との会話を楽しむ日々を送るうちに、気づけばなんと毎日2万歩も歩いていたのだ!大好きな屋台のおばちゃんが背中を押してくれたおかげで、韓国で出会った人々との温かい思い出に包まれ、ひとりで韓国に来たのに全く孤独を感じなかった20日間。スマホに記録された40万歩という文字の中には私だけの大切な記憶がたくさん詰まっている。

今や東京では多くの韓国人観光客や留学生を見かける。韓国で出会った人々への感謝を忘れずに、今度は私が誰かの屋台のおばちゃんになりたい。

優秀賞

25440 日目に行った DMZ

田中 郁美〔北海道〕

今年の3月下旬、友達と3泊4日の韓国旅行をした。計画を立てている時は、BTSのジンが兵役に行ったばかりで、日本でも隣国の兵役について話題になっていた。ファンである私も、どうして兵役があるのか納得できない気持ちが大きかった。友達も関心があり、私たちは南北境界線DMZ日帰り観光ツアーに申し込んだ。DMZに対して当時の私は、たまに耳にするハンモンテンが何なのかも曖昧だった。それが板門店で、どのような場所なのかも、この旅行を通して知った。

当日、朝6時30分過ぎに明洞を出発したツアーバスには、30人程の参加者がいた。日本語ガイド付きで、私たちのような20代のグループ、家族連れ、一人参加など、年齢も様々だった。どんな気持ちでDMZツアーに参加しているのか、一人一人に聞いてみたかった。私は、朝早くで眠かったが、参加のために一時的にパスポートを回収されたからか、少し不安で妙な緊張感を抱いて乗車していた。チョンさんというガイドの女性は、明るく笑顔の素敵な方で、かっこいい軍人に会えると冗談も交えつつ、これから訪れる所について色々説明してくれた。民族分断の過程、南北それぞれの兵役制度、離散家族の問題、DMZ内の村での暮らし。私は、彼女の明瞭な日本語で伝えられる現実を、ノートにメモし、また車窓から見たものすべてを目に焼きつけていた。話を聞きながら、どんな気持ちで何を考えるべきか分からなくなっていった。

そんな中、出発から1時間程バスに揺られると、境界線に近い臨津閣に到着した。ゴンドラに乗り臨津江を渡り、途中で途切れた橋の上から、川と北の景色を眺めたりした。その時、頭上に大きな白い鳥が3羽ほど、北の山に向かって悠々と川を越えて飛んでいった。それを見て、なんとも言えない虚しい気持ちになった。そして、フェンスに隙間なく結ばれた、色とりどりの祈りの布を見たら、モニュメントの前で記念写真を撮られる時、どんな顔をすればいいのか困った。

再びバスに乗って検問を通過すると、今度はトロッコのような乗り物で、第3トンネルを見学した。トロッコを降りた先は徒歩で、ジメジメ暗く狭い中を進んだ。行き着いたところで、3枚の壁を通して、隙間からその先の北の外の緑が見えた。壁の手前には、電光掲示板があり、25440という数字が点灯していた。それが休戦からの日数のカウントだと分かった時、戦争が決して過去の終わったことではないことを、リアルに感じられた。

私は日本人として、この現実とどう向き合えばいいのだろう。この旅行から帰ってきて半年が経とうとしているが、DMZどうだった？と聞かれても未だに言葉に詰まる。ただ、ぜひ機会があれば行ってみて、と伝えている。今日もカウントが続く数字を前に、できることがあるのか答えは簡単に出ないが、もう単なるKPOPの消費者ではられない。

優秀賞

半世紀前の面影を求めて

小宮 麻衣子〔東京都〕

—モノクロ写真を手に、池のほとりで右往左往しながらポーズをとる。

ソウルから KTX で 2 時間、南原にある名勝「広寒楼苑」で妙な行動をする私達は、韓流ファンの聖地巡礼と思われたかもしれない。数百年の歴史ある庭園は、古今を通じ愛される恋物語「春香伝」の舞台でもあり、ほか数多くの映画やドラマのロケ地であることを訪れて知った。

初渡韓である娘の急な提案で実現したソウル・釜山の旅で、私は途中一泊の寄り道をリクエストした。まだ肌寒い 3 月の平日は無料開放でも観光客は少なかったが、訪れた人皆幸せそうなのが印象的だった。4 年目に入ったコロナ禍も出口が見えた頃だったからだろうか。私達も羽を伸ばし韓国四大楼閣の一つという広寒楼や、大きな池に石造りの四つのアーチが美しい烏鵲橋（オジャッキョ）を巡った。

幼い頃、私はこの橋で池を覗き魚に餌をやった。約 50 年ぶりの再訪だった。記憶は定かでないが、古いアルバムの写真が記録していた。日本から私を連れて訪れた母達と韓服姿も見える十人ほどで散策している。母方の祖父のお母さんである当時 80 代の曾祖母に会いに行ったようだ。現在この街に知る人は誰もいない。でもあの瞬間を確かめたかった。

古い写真と同じアングルを探すも、歳月は背景を変化させ特定は難しかった。日が暮れる前によく半世紀のビフォーアフターを娘が撮ってくれた。あの日のハルモニに、曾孫が娘を連れて来ると伝えたいが…。

翌日は春香テーマパークなど街巡りをして別の写真検証を試みた。背景の山を手がかりに探したいのはハルモニと並んで写った縁側のある家だが、見つかるわけもなく時間切れに。そもそもハルモニの家だったか確証もないのだ。ホテルに戻る途中、土産店の通りでどの店先にもフクロウグッズを見かけた。かつて亡き祖父がフクロウの置物やぬいぐるみをくれたことを思い出した。私は懐かしくなって記念に何か欲しかったが店に入る勇気が出ない。コロナ禍の二年ほど独学で韓国語を学んだもののまったく身につけてなかった。ふと、ある店のおじさんがさり気なく声をかけてくれた。店内でかわいいフクロウの置物を二つ選び、思いきって写真を見てもらった。おじさんは裏通りでおしゃべり中のおばさん呼び、一緒に過去の烏鵲橋にいる小さな私に驚き、しばし片言の会話で盛り上がった。コーヒーを勧めてくれたが、列車の時間が近づいていいため失礼することに。店を出る際、おばさんは娘の背を優しくトントンと触れて送り出してくれた。今思えば、あと数分くらい大丈夫だったはずと悔やまれる。

帰国後まもなく、偶然見かけた韓国ドラマに広寒楼苑が映った。韓服の俳優が美しく映える烏鵲橋の光景は、まるで数世紀前の空気感だ。実際に長い歴史で悲喜こもごもの人間ドラマが生まれては眠る場所。たった半世紀前の小さな足跡を急ぎ足で探した私達だが、まだ縁は続くかもしれない。

佳作

ガメラ君の小旅行

長尾 賢一〔北海道〕

春が来れば思い出すのが北へ帰るガメラ君との旅の思い出です。ミレニアムの頃、拙宅はソウル江北の岸辺の団地にありました。団地前の河辺路のアンダーパスを潜ると河川敷に出ます。会話にも事欠く異国暮らしのストレス解消のため、漢江散歩を日課にしていました。土手の柳が芽を吹く頃に、散歩中の銅雀大橋の袂で掌サイズの亀を見掛けました。梅雨の長雨で河口から遙々ここまで流されて来たのでしょうか。川縁の溜まりにぼっかり浮かびながら目に涙を溜めて私を見ています。身につまされたので往年のヒーロー怪獣に因み、ガメラと名付けて自宅で飼うことにしました。人見知りのガメラ君も暫くすると縄張りを決めたようです。壁際のテレビと窓際の飾り棚の間で見掛けるようになりました。時が流れ帰国が近づきガメラ君との別れが迫ってきました。南山の桜舞い散る春うらら、ガメラ君を竹籠に入れ、故郷の河口を目指して車で河辺路を西に向かいました。新緑に染まる高陽辺りの田園地帯に入ると岸辺の景色が一変します。川岸には鉄条網が延び、堤防脇の監視塔には兵士が直立不動で周りに睨みをきかせています。岸辺を離れて北に向かう自由路の先に小高い丘が見えてきました。丘の麓の検問所では鈍く光る自動小銃を構えた鉄兜に迷彩服姿の兵士が行く手を塞いでいます。臨戦状態の坡州辺りでは観光客が作り笑いを浮かべても兵士の表情は変わりません。丘の頂の展望台に立つと正面の臨津江の対岸には赤茶けた台地が、左手の漢江と臨津江の合流点には泥まみれの干潟が広がっていました。丘の麓の自由路は京義線の汶山駅に向かって延びています。ガメラ君との別れの場を求めて行ける所まで辿ることにしました。静かに時を待つガメラ君がゴソゴソ動き始めた頃、彼方に臨津江の雄大な風景が現れました。汶山のレストラン臨津閣を過ぎると、鉄骨を三角に組み込んだトラス橋が目飛び込んできました。臨津江には朝鮮戦争で爆破された鉄橋の代わりに仮設のトラス橋が掛けられています。休戦協定が結ばれると、解放された捕虜が自由万歳と叫びながら仮設橋を渡りました。戦争の悲劇を象徴する橋は以来自由の橋と呼ばれるようになりました。橋の渡り口では休戦協定を管理する国連軍の歩哨が常に周りに目配りをしています。行く手を遮る鉄条網には北の縁者への想いを綴った布きれが縛り付けられています。自由の橋は戦争の現実と自由の大切さを噛みしめる場であり、離れ離れの北の家族を偲ぶ碑でもありました。泣く子も黙る板門店に近いので観光客が橋を渡ることはできません。先がないこの地がガメラ君との別れの場になりました。霧に煙る臨津江を望む橋の袂で竹籠を開けました。ガメラ君は籠から躊躇いがちに首を出し、甲羅を振り振り川に向かって行きました。北に渡ったのか干潟に向かったのか、長寿のガメラ君は今頃、河口辺りで一端の顔役になっていることでしょう。

佳作 旅と言葉

田淵 あずさ〔兵庫県〕

「年配の人は日本語がわかるはずだから、何とかなるよ。」

慶尚北道安東市河回村。

友達と2人。

釜山から始まり、安東を経由してのソウルへの旅。

釜山では当然のように日本語が通じたため、韓国では日本語が通じるとすっかり錯覚させた。

日も暮れかけ、もうこの村に泊まるしかない。ガイドブックによるといくつか民泊があるらしい。軒先に立てられたハングルの看板とガイドブックの写真を見比べながら民泊を探し当てた。

おばあさんが1人で住んでいる家に泊まることになり、おばあさんはジェスチャーを交えながら部屋に案内してくれた。私たちも日本語に加えて、ジェスチャーとメモ帳に日本語を書いて伝えた。

しかし、後にとても恥ずかしい気持ちになった。最初は何気ない友達の言葉に何の疑いもなかったが「日本語が通じる」というのはかつて日本が朝鮮半島を統治した際に日本化政策をすすめたからだ。私たちはあの日、おばあさんに日本語で話しかけ、日本語を書いて必死に意思を伝えようとしていたのだ。

ひょっとしたら、あの時おばあさんはとても嫌な思いをしたかもしれない。

おばあさんの声を知らない。

おばあさんの笑顔を知らない。

今もおばあさんの顔は思い出せるのに。

数年後、私はある程度、韓国語で意思疎通ができるようになり、一人でチェジュ島旅行をした。バスに揺られていると小さな村がところどころ現れた。バスの中できょろきょろ周辺を見ていると心配そうにおじいさんが声をかけてきた。どうするものか少しの間考えているとふと河回村での出来事を思い出し、急に緊張感が走った。

私は今、この状況を試されている。

「中央ロータリーまで行きたいのですが今どこなのか…。」

私が韓国語で答えると、おじいさんは私が外国人であることに気づいたようだ。

「ついたら教えてあげるよ。どこから来たの？」

「日本から来ました。大阪の近くです。」

おじいさんは仕事で大阪に行ったことがあるらしく、あれやこれやと思い出を話してくれた。その上、「ロータリー」の発音がおかしいからとチェジュ島なまりの韓国語で発音を教えてくれたり、好きな韓国料理の話をしたりした。

「スエが好きなんです」

この言葉を聞いたおじいさんは満面の笑みを浮かべた。

スндеのことをチェジュ島ではスエという。

言葉の力は偉大である。言葉は人を傷つけることもあるし、喜ばせることもある。旅を通じて私はそれを深く実感した。ほんの少しお互いの国の言葉を理解するだけで旅はぐっと楽しいものなる。

佳作

一風変わった私だけの韓国旅行

大橋 鈴々〔獨協大学〕

私の韓国旅行は一風変わっている。明洞？東大門？ 予定にない。チマチョゴリ？ ロッテワールド？ これまた予定にない。では、どこに何をしに行くのか。とある1日に密着してもらおうではないか。

仁川空港に降り立った私。初めて韓国に来た時に感じたあの「ワクワク感」はもう無い。慣れた足取りで空港鉄道に乗り、ホテルに荷物を置くと、またすぐに電車へと乗り込む。真っ先に向かう先は再度仁川。1号線の長い旅だ。

ところで、「なぜソウルではなく仁川？」と思う人も少なくはないだろう。実は私は過去の留學生活の大半を仁川で過ごしており、この留學の経験こそが、私を仁川へと向かわせているのである。

仁川に到着した私は、真っ先に食堂へと足を運ぶ。「最近話題の」といったものではなく、街の小さな食堂だ。注文はいつも決まって「ユッケビビンバ1つ、テイクアウトで」。そして食べるのは決まって과방（大学内の学科ごとの部室のような部屋）。ドアを開けるとそこには見覚えのある顔が見える。懐かしい場所で久しぶりに会う友達と食べる思い出の味は、どんな有名店の高級料理よりも遙かに絶品だ。そうしていると当時の友達が続々と集まってきて、久々の再会に会話が弾む。何も変わっていない友達、恋人ができて幸せそうな友達、さらには兵役を終えた新しい友達との出会いまで。単なる旅行中の昼食であるが、まるで同窓会に来たかのような感覚である。

そして、食後は常連のカフェへと向かう。ドアを開けると響く「어서 오세요 (いらっしゃいませ)」の声。そして目が合った瞬間に聞こえる「스즈! 돌아왔구나!! (すず! 戻ってきたんだね!!)」という言葉。留學終了間際に「ここを韓国の家だと思っ
ていいから。いつでも戻っておいで」と言ってくれたオーナーさんである分、その「돌아왔구나! (戻ってきたんだね!)」という一言が私を家に帰ってきたかのような感覚にしてくれることは言うまでもないだろう。そしていつものメニューを注文し、いつもと同じ場所に座る。何をすることもなく、オーナーさんと話しているうちに時間が流れていく。そうして日が沈んだ頃に、「꼭 다시 돌아올게요!! (必ずまた戻ってきますね!!)」と告げて、私はまた1号線の旅に出る。

見て分かる通り、観光地には一切足を運んでいない。しかし、旅行らしい旅行でなくとも、韓国に来て思い出の場所を訪れることや、久しぶりに大好きな人達に会うことこそが、私にとっては最高の韓国旅行プランなのである。「帰省」というものがない私にとって、初めてできた「戻る場所」。大げさかもしれないが、私にとっての韓国は今や「旅行先」を超えた「第二の故郷」のような存在になっている。

そんな、戻る場所のある「第二の故郷」とも言えるような韓国。そして仁川。私はこれからも、何度でも戻って来ようと思う。

佳作

かん国大すき

前岡 冬佳〔晃華学園小学校〕

わたしは、はる休みに、にじいろのスーツケースをもってかん国りょ行に行きました。わたしがかん国のれきしが大ききなのでオモニがつれていってくれました。はじめての外国りょ行だったので、とてもたのしみではりきって出かけました。金ほ空こうで地下てつにのろうとした時、オモニがチケットをかえなくてこまっていると、やさしいおばさんが日本語とかん国語でわたしたちをすくってくれました。とてもありがたいと思いました。地下てつにのったら、ゆう先せきにすわっていたおじいさんが、わたしに「アンジュセヨ」と声をかけてくれました。かん国ドラマで聞いたことがあるのでいみがわかり、おじいさんのとなりにすわりました。おじいさんは、わたしを見てずっとニコニコしていました。すこしはずかしかったです。かん国では、ガイドのおじさんとチャンドクン、ドラミア、水原ファソンに行きました。ガイドさんは、とてもやさしくて、ドラミアのバスうんてん手さんにたのんでチョコクソのろうごく前でとまってくれたり、わたしがたべられそうなかん国りょうりレストランにつれていってくれました。ガイドさんは、かん国りょうりをたべたことのないわたしに、からくないスンドゥップとチヂミとチャプチェをたのんでくれました。スンドゥップは、大きなてつなべで白いスープの中のとうふがおいしそうでたべてみたら、しばらくするとゲボしてしまいました。びっくりしたし、はずかしかったです。でも、どのりょうりもおいしかったです。オモニは、キキョウのキムチを気に入ってたくさんたべました。かん国のりょうりの中で一ばんおいしかったのは、ソウルのうすくて大きなトンカツです。ソースがあまくてほっぺがおちそうなくらいでぜんぶたべたら、お店の人がおかわりをもってきてくれておなかがふくれました。かえる時に、「またきてね」といって千ウォンねびきしてくれました。やさしくておもしろいおじさんだなどと思いました。ガイドさんの家でおめんづくりとコンジュさまのかんぶくをきて、ユンノリであそんだ時に、ガイドさんのむす子のけっこんしきのどう画を見せてもらいました。かん国のけっこんしきは、ゲームをしてまけたおむこさんがたくさんおさけをのんでおもしろそうだななどと思いました。ソウルのまちをあるいた時に、こうさ点のまん中に大きな門があっっておどろいたり、チャンドクンでは、本当に王さまがすんでいたきゅうでんがのこっていて、中をかん光できること、デパートやホテルなどどこに行っても子どもにやさしいのがとてもうれしかったです。かん国に行ったことでわたしのうんめいかわりました。かん国もれきしももっとすきになったので、かん国語のべんきょうをはじめました。一年に一回はかん国に行ってべんきょうしたかん国語を話したいです。わたしは、一生このかん国りょ行をわすれません。

最優秀賞

시로 이어가는 밤하늘의 오작교

李 東映 [帝塚山学院泉ヶ丘高等学校]

나는 오사카에서 태어나고 자랐지만, 한국 이름을 갖고 있다. 세상의 모든 가족은 아기가 태어나면 사랑과 희망을 담아 이름을 짓는다. 할아버지는 한국과 일본을 밝게 비추라고 ‘東映’ 이라고 지어주셨다. 이름만 보면 영화를 좋아할 것 같지만, 나는 시 마니아다.

시를 좋아하게 된 이유는 깊은 의미가 함축되어 있으면서 짧아서다. 학년이 올라가면서 한국어를 공부할 수 있는 시간이 줄었다. 1시간 공부가 1분으로 줄었다. ‘잠들기 전 1분을 어떻게 효율적으로 활용할까? 안 할 수는 없고…….’

어느 날 우연히 김춘수 시인의 꽃이라는 시가 눈에 들어왔다.

〈내가 그의 이름을 불러주기 전에는 그는 다만 하나의 몸짓에 지나지 않았다. 내가 그의 이름을 불러주었을 때 그는 나에게로 와서 꽃이 되었다〉

아무 존재도 아니었는데 이름을 불러줌으로써 특별한 사이가 됐다는 내용이다. 시를 읽은 다음 날 친구의 이름과 선생님의 성함을 의식해서 불러봤다. 놀랍게도 많은 분이 꽃처럼 웃음을 짓는다. 이렇듯 자유롭게 솔직한 시는 문화와 시대를 넘어 현실 세계에 스며든다. 100년 전의 영상은 지금과 다르다. 하지만 100년 전의 시는 지금 읽어도 갓 뽑은 가래떡처럼 따끈하다. 무궁무진한 1분의 힘이다.

나에게는 가까운 미래에 이루고 싶은 꿈이 두 가지 있다. 하나는 한국과 일본의 우정과 미래를 담은 시를 쓰는 거다. 한국과 일본을 알고 사랑하는 사람만이 쓸 수 있는 사람의 체온처럼 은은한 온도를 품은 시. 한국에는 지하철 스크린 도어에도 공중화장실 개인 칸에도 시가 쓰여 있다. 내 시가 아마추어 공모전에 뽑혀 사람들의 시선과 마음에 머무르게 되면 얼마나 좋을까?

그다음 꿈은 대학교에 가서 한국의 전통문화와 언어를 알리는 동아리를 만드는 것이다. 한국 특유의 정서가 담긴 시문학을 일본어와 영어로 번역하고 싶다. 미래에 만날 친구들과 좋은 번역본을 만들기 위해 고민하며 앞으로 나아가려고 한다. 감정의 공감을 품은 사람 체온을 느끼는 번역본으로 한국과 일본을 연결하는 오작교를 꿈꾼다. 은하수를 건너지 못하는 견우와 직녀의 다리가 돼 준 까마귀와 까치. 나와 미래의 동아리 친구는 두 나라를 이어주는 밤하늘의 까마귀와 까치다. 이것이 내가 생각하는 한국과 일본의 소소하면서 멋진 교류다. 시의 오작교는 칠월칠석은 물론, 매일 만날 수 있다. 내 이름의 의미처럼 한국과 일본을 밝게 비추는 의미 있는 존재가 되기 위해 오늘도 잠들기 전 1분, 시를 읽어간다.

優秀賞

한국어의 고유어

秋月 璃羽 [N 高等学校]

내가 좋아하는 한국 문화는 한국어의 고유어다. 한국어는 일본어와 문법이 거의 같고, 발음이 비슷한 단어도 많다. 하지만 한국어를 알면 알수록 일본어에는 없는 표현이나 개념이 있다는 것을 깨달았다.

예를 들면 “눈치”. 다른 사람의 기분이나 그 자리의 상황을 빠르게 파악하는 능력을 말한다. 일본어로 말하면 “空気を読む (공기를 읽다)” 라는 의미가 되지만 “있다” “보다” “주다” “채다” 등의 동사와 함께 사용하면 다양한 표현을 할 수 있다. 상하관계가 특히 엄격한 한국에서는 상대방의 감정과 상황을 읽고 적절한 행동을 취하는 것이 중요하다고 할 수 있다.

그런 한국어 특유의 표현이나 개념 속에서 내가 가장 매력을 느꼈던 것은 바로 “멋”이다. “멋”은 미적인 것을 말할 때 사용하는 미학용어이자 문학용어다. 일본어로는 “粋” “洒落”라고 번역되지만 개인적으로 이 단어들은 “멋”에 완벽히 대응하는 단어가 아니라고 생각한다. 외국어로 표현하려고 하면 단순히 비슷한 뜻을 가진 단어일 뿐이고 “멋” 그 자체를 표현하는 단어는 한국 밖에 없다. 이것은 시간이 점점 흘러서 멋이 표현하는 뜻이 변해졌기 때문이라고 생각한다. 본래는 사람의 매력이나 사람이 만든 작품, 풍경의 모습을 평가하는 말이었다. 하지만 시간이 흘러서 상대방에게 존경 받을 만한 행동을 보고 말하는 단어로 변해서 성별 구분 그리고 생물, 미생물 가리지 않고 매력적인 모습을 칭찬할 때 쓰이는 단어가 되었다.

현대에서는 “멋있다” “멋지다”라는 말은 삶 속에서 광범하게 쓰이고 있는 말이면서도, “멋” 단독으로는 구체적으로 설명하기 어렵다고 느꼈다. 한국인만이 알 수 있는 감각적인 말이라는 점이 굉장히 매력적이다.

언어는 문화의 하나다. 문화가 다르면 탄생하는 표현도 달라진다.

문화에서 말이 나오기도 하고, 그 말이 문화를 만들기도 한다. 말이 감각을 인식하게 하고, 감각이 말을 만들기도 한다. 그래서 나는 그 나라의 역사를 말해주고 있는 고유어의 매력을 느꼈다. 앞으로도 언어 학습을 통해 그 나라에서만 볼 수 있는 표현이나 개념을 습득하고 역사와 문화를 접하고 싶다고 생각한다.

優秀賞

하늘과 바람과 별과 영화 ‘동주’ ...

山本 花音 [京都国際高等学校]

보통의 일본중학교를 다닌 저는 조선에 대해서 간단하게 배웠습니다. 중학교 때 수업에서는 자주 “과거는 과거다. 지금의 한일관계를 생각하자.” 라고 말해서, 최근까지도 공감하고 있었습니다. 그런데 영화 ‘동주’ 를 보고, 그의 시 ‘서시’, ‘쉽게 찢어진 시’ 를 배우게 되었습니다. 그리고 예전까지의 생각이 크게 변화되었습니다.

교과서 속의 글자로만 배웠던 창씨개명 등 황민화 정책의 정신적 폭력의 크기를 다시 한 번 실감하게 되었습니다. 자신이 누구인지 다른 사람이 정하는 것, 심지어 그것을 정치적으로 이용하고 유사시에는 권력자의 책임을 회피하는 변명으로 쓰거나 더 심한 책임을 떠넘겼던 역사적 사건을 마주했습니다. 재일한국인은 물론 재일외국인이라고 불리는 사람들이 계속 차별과 싸우고 있는 것에 정말 마음이 아팠고, 이런 부당한 정신적 부담을 지게 하는 것은 용서받을 수 없는 일이라고 생각했습니다. 또한 일본군이 인간을 대상으로 생체실험을 진행했다는 사실을 처음 알았고, 운동주의 옥중 모습이 제 가슴을 아프게 했습니다. 일본인으로서 지금까지 아무것도 몰랐던 것에 반성하는 마음이 들었습니다.

그리고 과거와 마주하는 것이 중요하다고 생각했습니다. 과거와 마주하지 않으면 지금의 한일관계도 생각할 수 없고, 모든 것이 과거에서 지금으로 연결되어 있는 일이라고 생각했습니다. 또한 잔혹했던 것 같은 현실과 역사에 대해 아직 모르는 것이 많아서 일본인들은 좀 더 한국에서 했던 일을 알아야 한다고 통감했습니다.

이야기는 달라지지만, 운동주는 정말 타고난 시인이라고 생각했습니다. 만약 계속 살아있었으면 이라고 생각하니 마음이 아픕니다. 아직 살아있다면, 더 멋진 시를 쓰고 더 자유롭게 시를 쓸 수 있었다고 생각하니 정말 슬픕니다. 송몽규는 운동주가 사상에 물들지 않고 시를 계속 썼으면 좋겠다고 생각했습니다. 운동주와 송몽규의 끈끈한 인연으로 서로 도우며, 운동주는 시를 쓰고 송몽규는 열심히 독립운동에 참여하고 있는 모습도 감동이었습니다.

저는 이렇게 영화에서 받은 감동을 확장시켜, 시인 운동주의 발자국이 남아있는 이곳 교토에서 그를 이해하기 위해 시집 ‘하늘과 바람과 별과 시’ 를 읽고 있습니다. 또한 역사 공부도 하고 있습니다. 그리고 한국의 대학에서 유학하는 제 미래를 꿈꾸고 있습니다. 과거를 이해하고 지금을 인정한다면 보다 끈끈한 한국과 일본의 미래를 그릴 수 있다고 생각하면서요.

佳作

내가 좋아하는 한국콘텐츠 K 드라마

荒川 さや [滋賀県立国際情報高等学校]

내가 처음으로 한국 드라마를 진심으로 재미있다고 느끼게 된 계기는 작은 변화였지만, 고2 생활이 시작되고 한국어를 과목을 공부하고 접하면서부터였다. 지금까지는 자막을 의지하며 드라마를 보았기 때문에 자막의 번역 그대로를 배우들이 직역한다고 생각했다. 하지만, 공부를 시작하면서 단어와 표현을 통해 직역이 아니라는 것을 알게 되었다.

어느 날 드라마 속에서 내가 유일하게 알고 있었던 「미안해」 라는 말이 나왔다.

그런데 자막에는 그냥 미안하다는 말이 아닌 내가 잘못했다고 하는 다른 표현이 첨가되어 의역된 표현으로 나온 것이 아닌가... 번역? 자막? 의 신세계를 본 듯한 느낌이라고 할까? 아니면 이렇게 해도 되는 건가? 하는 여러 가지 마음이 교차하는 순간이었다.

궁금한 마음에 나는 다음 날 학교에서 교과목 선생님께 물어보았다. 선생님께서는 번역자에 따라 내용이 조금씩이지만, 느낌을 다르게 표현할 수도 있다는 이야기를 들었다. 그날 이후 자막을 의식하면서 배우들의 대사를 들으며 바쁘게 드라마를 보게 되었다. 덕분에 내용을 이해하기보다는 표면적인 것만 의식을 해서인지 두 번, 세 번씩 많은 시간을 들여 보게 되었다. 교과서에서는 배울 수 없었던 표현을 찾거나 알게 되었을 때 나 자신에게 감동하고 있다. 한국 드라마의 자막은 번역자에 따라서 달라서 몇 번을 봐도 재미를 느낀다.

앞으로 나는 고등학교 졸업 후 대학에 진학할 예정이다. 대학에서도 한국어를 열심히 배울 것이다. 그리고 그 한국어를 잘 이해해서 일본인에게 조금이라도 그 문화의 배경과 상황을 간략하면서도 자세히 전달하고 싶다. 지금 당장 번역가가 될 수 있을지 없을지는 모를 일이지만, 한마디의 대사를 번역자에 따라서 보는 사람에게 감동과 유머를 줄 수 있는 그런 미래를 꿈꿔보고 싶다. 5초의 승부사가 되기 위해 나는 노력을 멈추지 않을 것이다.

佳作

신비한 의사소통 「밥 먹었어?」

上原 優 [滋賀県立国際情報高等学校]

나는 고등학교 2학년이고 지금 제 2 외국어로 한국어를 공부하고 있는 학생이다. 한국 관련 콘텐츠는 트와이스로부터 시작됐다. 음악도 좋았고 춤도 잘 추고 나에게는 그저 멋진 아이돌이었다. 지금은 가나다라를 시작해서 조금 단어를 읽고 쓸 수 있지만, 한글을 공부하기 전에는 알 수 없었던 말이었다. 영상을 보며 궁금한 말이 하나 있었다. 그 말은 바로 “밥 먹었어?” 라는 말이었다.

이 말은 드라마나 한국 아이돌 동영상 콘텐츠에도 많이 등장한다. 한국어를 공부하기 전, 한국을 알기 전에는 들어본 적도 없고, 듣고 보고도 의미를 알 수 없는 말이었다. 여러 사람이 말하는 음성 속에서 그 사람의 말투에 섞인 음색, 표정들이 매력적으로 다가왔다.

나는 어떤 의미인지 본격적으로 찾아보기로 했다. 그 결과 밥을 먹었는지를 묻는 의미였다. 놀랐다. 아주 유명한 인사 「안녕하세요?」 나 「안녕」 이라는 뜻이 없어서였다. 하지만, 그 사용 빈도는 거의 일본어의 「곤니치와」 와 같은 사용 횟수라고 생각했다. 일본인인 나로서는 도저히 이해가 가지 않았다.

밥 먹었는지 안 먹었는지 왜 물어볼까? 라는 생각이 꼬리를 물었다. 또다시 궁금증을 안고 찾아보았다. 그 이유는 바로 역사적인 배경을 시작으로 전쟁이 끝난 후 가난했던 시대에 식량을 구하고 먹는 것이 어려웠고, 사람들을 만날 때마다 건강을 물어보는 안부 인사라는 것이었다. 이 말은 단순히 밥 먹고 안 먹고가 아니라 말하고 듣는 사람이 서로 건강히 잘 지내는지를 염려하고 걱정하는 중요한 인사법이였다.

배경을 알고 나니 더욱 그 표현에 애정이 느껴졌다. 직접적인 화법 “잘 지내?” 라는 말보다 “밥 먹었어?” 라고 누가 나에게 물어봐 준다면 마음이 따뜻해지고 긴장도가 낮아지며 친근감이 느껴질 것 같은 기분이다. 처음에 뜻도 모르고 들었을 때 이 한마디가 이렇게까지 나를 변화시킬 거라는 생각조차 하지 못했다.

내 마음에 꼭 드는 이 한마디가 앞으로도 미래에도 영원히 없어지지 않고 계속 사용됐으면 좋겠다. 이 글을 읽는 모든 친구한테 물어봐야겠다. 「밥 먹었어?」

佳作

나의 원동력 K-POP

山里 心 [つくば開成国際高等学校]

나는 중학교 삼 학년 때부터 몸이 안 좋아져서 한때는 학교에도 못 갔던 시기도 있었다. 몸이 안 좋은 건 내 잘못이 아닌데 학교에도 안 가고 그냥 쉬고 있는 나 자신이 너무 싫어서 나한테 너무 화가 나고 동시에 많이 불안해졌다.

그때 나한테 위로를 줬던 곡이 방탄소년단의 'Magic Shop' 이었다.

'Magic Shop' 은 실제로 사용되고 있는 심리 요법 중 하나로 공포나 걱정을 팔고 긍정적인 생각을 얻을 수 있는 가게를 비유하고 있다. 방탄소년단은 그 가게를 멤버 자신으로 비유하며 팬들에게 항상 따뜻한 말을 해주시고 의지할 수 있는 안식처로 되어주고 있다.

특히 나한테 많은 힘을 준 가사가 있다.

‘내가 나인 게 싫은 날 영영 사라지고 싶은 날
문을 하나 만들자 너의 맘 속에다
그 문을 열고 들어가면 이 곳이 기다릴 거야
믿어도 괜찮아 널 위로해줄 Magic Shop’

계속되는 하루하루가 힘들어서 다시 하루가 시작되는 아침이 오는 게 너무 두려웠는데 이 곡을 들으면 '나한테는 든든한 내 편이 있다' 라는 게 느껴져서 마음이 편해졌다.

그리고 "Love Yourself" 라는 말을 만나게 된 것도 방탄소년단이 계기였다. 그 말을 만나게 될 때까지는 나 자신을 사랑하는 것에 생각을 해본 적도 없었다. 항상 어딘가 약한 내가 너무 싫어서 자기 자신을 탓하기만 했었다. 하지만 과고의 실패나 괴로운 경험들이 있었기에 지금의 내가 있는 거고 그 하나하나가 인생이라는 별자리를 만드는 빛나는 별들이라는 것을 알려줘서 지금 그대로의 나 자신을 사랑할 수 있게 열심히 하고 있다.

이런 방탄소년단의 말들 덕분에 지금은 내가 이런 쉬어야 하는 기간을 지냈던 것도 다 나의 양식이 되는 경험이라고 생각하고 앞을 보고 한걸음 씩 나아가고 있다. 지금도 내가 나인 게 싫은 날은 가끔 있지만 그런 나조차도 인정하고 '괜찮아 질 거야' 라고 스스로 말해주고 있다.

지금 나는 케이팝뿐만이 아니라 한국어나 한국 문화 자체에 관심을 갖고 독학으로 한국어를 배우고 있다. 그리고 한국어를 배울 수 있는 대학에 가려고 생각하고 있다. 내 꿈은 한일간의 가교 역할을 할 수 있는 일을 하는 것이다. 많은 사람에게 말을 전하고 내가 많은 힘을 얻었던 것처럼 언젠가는 그 말이 누군가에게 한 걸음 나아가는 용기가 되었으면 좋겠다.

佳作

우리가 그려가는 한일의 미래

久保 直香 [山口県立山口高等学校]

한국과 일본의 역사에는 지울 수 없는 상처가 있다. 지금 우리가 그려가는 미래의 역사는 어떻게?

나는 근대사를 배울 때 마음이 아프다. 나는 내가 살아가는 지금을 마지막 쪽까지 전쟁이라는 글자 없이, 슬픈 사진 하나도 없이 그려가고 싶다. 미래의 사람들이 평화로운 역사를 배우면 좋겠다.

한일의 미래를 평화롭게 하기 위해서는 폭력과 전쟁 말고, 협력과 좋은 경쟁이 필요하다. 한국과 일본은 같이 해결해야 하는 문제도 있고 서로 도움이 되는 것도 있다. 정치적으로는 서로 다른 주장을 잘 듣고 대화를 통해서 조금씩 다가가야 하고 같은 위협에게서 나라를 지켜야 한다. 경제적으로는 경쟁하면서 서로의 기술력을 높일 수 있고 서로의 높은 기술과 가까운 지리를 활용해서 EU 처럼 강국에 대항할 수도 있다. 때로는 마음을 모으며 같은 일을 해내고, 때로는 절차탁마하며 함께 성장할 수 있으면 한일관계도 한국도 일본도 더 좋아지다고 생각한다.

그리고 또 하나, 한명 한명의 작은 교류도 중요하다. 한국문화도 일본문화도 서로 인기가 있다. 그 문화에 대한 관심이 그 나라의 언어에 대한 관심이 되고, 그 언어로 그 나라의 사람들과 이야기하고 싶게 되면 작은 교류로 이어진다. 나도 그랬다. 그래도 가끔 한국 사람들이 나를 받아줄지 불안해진다. 과거에서 일본이 권력을 휘두르며 한국에 나쁜 것을했다는 것은 안다. 일본이 한 심한 일때문에 아직도 괴로워하는 한국 사람들의 마음은 나에게서는 도저히 알 수 없다. 일본 사람을 보기도 싫은 사람도 있겠다. 그래도 일본인이라는 이유만으로 한국 사람들과 잘 지내고 싶은 나까지 싫어하면 억울하다. 그 반대도 그렇다. 국적으로 사람을 판단하지 말고 어떤 사람인지 알고 서로를 이해하는 것이 조금씩 한국과 일본 서로의 신뢰에 이어진다고 생각한다.

한일의 미래의 역사, 우리가 함께 행복하게 그려가자!

最優秀賞

천천히 가도 돼! ~ 옷놀이 같은 우리 인생 ~

本間 希実 [新潟大学]

아저씨들: “지화자~!”

“앗싸~! ‘모’니까 한 번 더 던질 수 있겠다!”

옷들: “아~ 너무 많이 던져져서 어지러워~!”

“아, 아파! ‘모’가 나와서 기뻐하지만... 우리 옷들은 바닥에 떨어져서 아픈데~.”

옷놀이마을에서는 옷놀이하는 아저씨들과 옷들이 있었고, 옷들은 던져질 때 어지럽고 둥근 배 (뒷면) 로 떨어져서 배가 아프고 등 (앞면) 으로 떨어져서 등이 아프고 매일 하는 일 (옷놀이) 이 너무 힘들었다.

그러던 어느 날 4 명의 옷들에게 한 통의 편지가 왔다.

옷놀이마을의 옷들에게

옷들아, 안녕?

나는 혼마 노조미라고 해. 2년간 한국어와 한국 문화를 배우고 있는데, 특히 너희 일인 옷놀이는 내가 가장 좋아하는 한국 문화야. 오늘은 옷놀이 덕분에 내가 도움이 된 일이 있어서 너희들에게 감사의 마음을 전하고 싶어.

옷놀이는 옷을 던지고 앞면과 뒷면이 나오는 개수에 따라서 말을 앞으로 움직일 수 있는 점, 옷판의 모서리나 중심에서만 지름 길로 갈 수 있는 점, 자기 팀의 말을 엮었을 때 도중에 잡힐까 봐 긴장하는 점, 「도, 개, 걸, 옷, 모」 중에 무엇이 나올지... 또 무슨 일이 일어날지 모르는 가운데 지혜를 발휘하거나 운에 맡겨서 마음껏 옷을 던지는 점 등이 예측 불가능한 우리 ‘인생’ 과 비슷한 것 같아.

성적이 오르지 않아서 고민하는 과외 학생이 “선생님, 가고 싶은 고등학교에 합격하지 못하면 어떡하죠?” 라고 내게 물어서 옷놀이 이야기를 해 줬어. “모가 나오면 한 번 더 옷을 던질 수 있고 앞으로 갈 수 있지만 골인 지점에 도착할 때까지 모가 계속 나올 수는 없어. 이처럼 시험 때마다 성적을 올릴 수는 없으니가 가끔 멈춰서서 다시 생각해 보거나 다른 방법을 찾아봐야 할 때도 있어.” 라고 했더니, “선생님, 옷놀이는 인생과 비슷하네요. 웬지 마음이 홀가분해진 것 같아요. ‘모’만 나오면 빨리 골인할 수 있겠지만 저는 ‘도’ 밖에 나오지 않아도 조금씩 앞으로 나아가 볼게요” 라고 중학생이 말했다. 한국에서는 이런 것을 ‘모 아니면 도’ 라고 한대.

너희 옷놀이 덕분에 나는 한국 문화를 즐길 뿐만 아니라 중학생에게도 열심히 공부할 수 있는 용기를 준 것 같아서 정말 고마워.

편지를 읽은 한 옷이 “인간이 우리 옷들에게 용기를 얻었다니 보람 있다. 근데 ‘백도’ 를 모르나 봐. ‘도’ 다음에 ‘백도’ 면 골인인 것처럼 앞으로 나아가는 것만 아니라 뒤로 돌아가는 것이 행운일 때가 있는데!” 라고 말했고 옷들은 서로를 보면서 미소를 지었다.

優秀賞

오늘은 너를 위해서 쓴다

平井 彩花 [滋賀県]

요즘 말로 썸을 타던 지인이 첫 데이트 날에 헤어졌다. 첫 식사를 마쳤을 때 일본 남자 J가 한국인 여자 친구 K에게 “식사비로 천 엔만 보태 줘.” 라고 말한 것이 화근이 되었다.

일본에서는 와리칸이라는 말이 일반적으로 쓰이는 데 비해 한국에서는 각출, 각자 내기, 더치페이, 와리칸, 분파이...등, 한자어부터 한글 고유 표현, 외래어에 이르기까지 다양한 단어가 쓰인다. 왜 그럴까?

코로나 시국 때 온라인으로 한국 학생에게 일본어를 가르쳤다. 하늘길이 열리자마자 나는 화면 속의 친구를 만나러 비행기를 탔다. 분명 첫 대면인데 첫 대면이 아닌 우리는 바로 의기투합했고 삼겹살을 먹으러 갔다. 고기는 꿀맛이었지만 내 머릿속은 복잡했다. J와 K의 비극을 되살리며 실수 없이 행동하고 싶었다. 그런데 친구가 빛과 같은 속도로 내 밥값까지 지불해 버리는 것이 아닌가.

(다음은 계산대 앞에서 나는 친구와의 진솔한 대화 내용)

나 : 내가 먹은 건 내가 낼게”

한국 친구 : 여기는 내가 낼 테니까 커피는 아야카가 사줘.

나 : 삼겹살 2인분과 커피 한 잔은 가격 차이가 너무 큰데…….

이럴 줄 알았으면 1인분만 먹을 걸…

한국 친구 : 한국도 더치페이를 하기는 하는데 아직은 “쓰는 문화” 야.

게다가 아야카의 한국에서의 첫 식사니까 꼭 사주고 싶어.

한국어에 더치페이에 관련된 표현이 유독 많은 이유가 각자 내는 것에 대한 썸김 때문일지도 모른다. 나는 한국의 쓰는 문화가 좋다. 즐겨보는 한국 영화에서도 누군가 풀이 죽어 있으면 “제가 커피 한잔 사겠습니다.” 하면서 힘을 보탠다. 쓴다… 라는 것은 단순히 돈을, 물질을 그 사람에게 쓰는 것이 아니라 나의 응원과 애정과 관심을 그 사람에게 쏟아붓는 것이다.

요즘은 한 끼 3만 원, 선물 5만 원, 경조사비 10만 원이라는 3·5·10이라는 룰이 생겨, 쓰는 문화에도 변화가 있다고 한다. 하지만 내 친구에게도 갓 제작된 영화에도 여전히 쓰는 문화가 남아 있다. 다행이다.

주머니 사정이 넉넉지 않을 때 편히 만날 수 있는 상대가 한 명이라도 있으면 행복할 것이다. “오늘은 내가 밥 사줘. 다음에는 내가 살게.” 이렇게 말할 수 있는 상대가 나에게 있어 있다. 이것은 나를 생각해서 첫 식사를 기꺼이 싸 준 베품의 문화 덕분이다.

마지막으로 「J가 K의 쓰는 문화에 관한 암묵적인…」 이 말을 한일 커플에게 해주고 싶다.

優秀賞

한국라면의 매력에 빠져드는 일본 사람들

渋谷 牧子 [東京都]

한국 음식이라면 김치나 순두부찌개나 삼겹살 등을 많이들 생각했다. 하지만 요즘에 우리에게 가장 친근한 존재는 한국라면이 아닐까 싶다. 예를 들면 S 라면은 어느 슈퍼에서든 눈에 띄고 또 손쉽게 살 수 있다. 하지만 일본에 있는 한국슈퍼에 가면 수많은 한국 라면이 즐비하게 진열돼 있고 묶음 라면뿐만 아니라 날개 구매도 가능해 여러 종류의 라면을 맛볼 수 있어 참 좋다.

이렇게 우리들에게 익숙한 S 라면뿐만 아니라 새로운 라면들이 줄지어 나와 우리들을 현혹시킨다.

한국라면이 어떻게 이렇게까지 우리들에게 친근한 존재가 되었을까? 내 생각에는 분명히 한국 드라마의 영향이 큰 것 같다.

드라마에 자주 나오는 라면을 먹는 장면은 우리들에게 군침을 흘리게 하며 참을 수 없는 강한 식욕을 불러 일으킨다.

한국라면과 일본 라면의 다른 점이라면 그건 바로 몇 가지 야채를 잘라서 건조시킨 건더기 스프! 그래서 다른 재료를 따로 넣지 않고 라면만 끓여도 충분하고 깊은 맛을 자랑한다. 그러나 기호에 따라 파나 계란 등을 넣으면 더없이 멋진 한 그릇 식사가 탄생한다. 우리 생활 속 깊숙히 자리잡은 한국라면! 드라마 속에 자주 등장하는 라면을 먹는 장면은 유달리 우리들의 눈길을 끌며 하염없이 빠져들게 한다. 예를 들면 씬을 타고 있는 남녀주인공이 상대의 권유로 같이 라면을 먹게 되고 드라마 속 주인공들은 우연이라 하기보다는 약속이라도 한 듯 라면 한 가닥을 동시에 입에 물게 되고... 바로 그때!! 묘한 분위기가 만들어지면서 서로의 눈에 빠져들 듯 서로를 응시한다. 드디어 커플 탄생의 순간이다. 나는 혼자서 라면을 먹을 때면 어김없이 그 장면이 떠오른다.

드라마나 영화 속 라면이라는 아이템은 주인공들의 사랑이 시작된다는 의미의 복선으로 자주 나와서 내 가슴과 불을 빨강게 물들이며 10 대의 풋사랑과 같은 두근거림을 선사해 준다.

이런 심쿵 아이템 한국라면이 매운맛에 약한 우리 일본사람들을 매운맛에 길들여지게 하고 우리들의 마음 공략에까지 성공한 것 같다. 이렇게 한국라면은 그 매운 맛만큼이나 뜨거운 인기몰이를 계속 해 가고 있다. 맵지만 끊을 수 없는 강한 매력으로 우리를 유혹하고 사랑까지 독차지하게 됐다. 한국라면! 단순한 인스턴트 라면이 아니라 설레이는 사랑의 아이템이며 또 하나의 한류라고 생각한다

佳作

내가 좋아하는 한국문화

立野 望美 [北星学園大学]

"일어나!"

로미오라는 이름의 이불과 줄리엣이라는 이름의 나를 매일 아침 갈라놓는 것은 운명이라는 이름의 늘 일찍 일어나는 엄마 목소리다. 우리 엄마는 쾌활한 한국인이고, 우리 아빠는 텔레비전을 매우 좋아하는 일본인이다. 일본에 살면서도 엄마와 함께라면 마치 한국에 있는 것 같은 생활을 보내고 있다. 그런 다양한 한국 문화가 넘쳤던 나의 하루를 소개하겠다.

나의 아침은 매일 주먹밥 혹은 참기름과 간장을 섞은 밥에 계란프라이를 먹는 것으로 시작한다. 그리고 바나나는 식욕이 없는 아침에도 간단하게 먹을 수 있어 마음에 든다. 내가 아침을 먹고 있는 옆에서 우리 엄마는 항상 사과를 먹으면 하루 종일 활동할 수 있다고 한다.

음...사과가 아침 식사에 나온 적이 지금까지 있었던가?

아침 준비를 하는 도중에도 엄마는 이것저것 말을 걸어온다. 분실물은 없는지 집 열쇠는 챙겼는지. 한국 사람들은 매사참견을 하고 싶어하는 경우가 많은데, 그런 참견이 무언가를 잘 잊어버리는 나에게는 딱 좋을지도 모른다. 버스 시간이 촉박해 매일 아침 크게 당황하는 나를 재촉하는 "다녀와!". 마음에 드는 신발로 내딛는 첫걸음은 웬지 지각으로부터 지켜주는 느낌이다.

주황색이 비치는 저녁이면 어김없이 엄마에게서 평소와 같은 메시지가 온다. "지금" "어디" "버스" "몇 시". 한국 사람들은 연락하는 것을 매우 좋아한다. 내게 오는 문자는 서투른 한국어인데, 엄마들이 휴대폰에 익숙하지 않은 건 분명 전세계 공통일 것이다. 집에 돌아와 현관문을 열고 나는 내 하루 중 마지막 즐거움을 찾아 인사 대신 이렇게 말한다.

"배고파!"

저녁은 오므라이스나 김치찌개나 잡채도 있는데 항상 식탁에 있는 건 김치다. 나랑 김치는 어찌면 쌍둥이일지도 모른다. 왜냐하면 우리는 매일 함께이기 때문이다. 집 집마다 김치 맛이 다르지만 누구나 자기 집 김치가 최고일 것이다. 언젠가 내가 총리대신이 되면 우리 엄마의 김치를 미슐랭 가이드에 올릴 것이다.

"잘 먹었습니다!" 밥 먹고나서 감사를 전하는 것은 일본이나 한국이나 마찬가지로 매우 멋진 문화다.

밥을 먹고 나면 씻고 양치질만 하면 된다. 이렇게 한국문화가 가득한 하루가 오늘도 끝난다. 항상 일찍 일어나는 엄마는 항상 일찍 주무신다. 내가 목욕을 마치고 나올 때 쯤이면 금방이라도 잠이 들 것 같은 엄마가 침실에서 내 이름을 부른다. 나는 아침에 들었던 일어나라는 목소리를 떠올리며 하루의 끝을 고한다.

"잘자요 엄마"

佳作

3 년전의 나에게

諏訪 ななみ [東京成徳大学]

안녕 나는 2023 년의 너야. 너는 지금 고등학생 3 학년이고 아직도 진로에 대해 고민하고 있지? 부모님께서 영어를 공부하라고 말하지만 너는 원래 관심이 많았던 한국에 대해 공부하고 싶다고 생각하고 있을거야.

언제였는지 나도 정확히는 기억하지 않는데 너는 사랑하는 할아버지께서 인생을 바꾸는 소중한 말을 들을 것이야. 그 말을 계기로 너는 한국과 일본의 가교가 되는 사람이 될 것이라고 큰 결심을 할거야.

나는 큰 결심을 해준 너에게 고맙다는 말을 전하고 싶어. 너 덕분에 지금의 내가 있어. 진짜 고마워.

대학교에 입학해서 나는 1 년동안 한국 유학을 경험했어. 그 유학을 통해 한국어나 한국 문화를 많이 배웠던 것 뿐만 아니라 한국 사람들의 따뜻한 마음을 많이 느꼈다.

나는 시장에 가서 아저씨나 아줌마랑 예기하는 시간을 너무 좋아했다. 내가 유학 갔을 때는 코로나라는 바이러스 때문에 1 년동안 1 번도 일본에 귀국하지 못했다. 그래서 너에게는 그 시간이 가족이랑 얘기하고 있는 것 같은 즐겁고 행복한 시간이였다.

그 경험을 통해 나는 한국을 더 좋아해 졌고 나라에 가야 알 수 있는 것이 많이 있다고 배웠다. 나는 직접 보고 알게 되었던 것을 많은 사람들에게 전해려고 해.

그리고 지금 대학교 3 학년인데 취직 활동을 시작했어. 3 년전에 했던 결심대로 한국과 일본의 관계를 좋게 할 수 있는 일을 구하고 있어.

솔직하게 말하면 2023 년 현재 한국과 일본에 대한 뉴스를 보면 아직 관계가 완전히 좋아졌다고는 말할 수 없다. 하지만 앞으로 관계가 조금씩이지만 확실히 좋아질거라고 말할 수 있어.

왜냐? 너가 가진 꿈을 내가 아직 포기하지 말고 이루려고 하고 있으니까.

너는 이 편지를 안 읽어도 꿈을 향해 열심히 할것이라고 나는 알고 있어. 1 번 정한 일은 포기 하지 않은 성격이라는 걸 내가 누구보다 잘 알고 있으니까.

나는 앞으로도 열심히 할게. 우리 화이팅하자!

佳作

~ 양국 미래의 연장선 ~

齋藤 みづほ [創価大学]

뉴스에서 보도하는 한국과 일본과의 정치 문제, 사라지지 않는 역사의 문제들은 해결책을 찾기는커녕 점점 더 복잡해지고 있다. 하지만 나는 양국의 미래가 그러한 문제들의 연장선이 되지 않기를 바란다. 한일 문제에 대해 복잡하게 의논하는 사람들을 보면, 문득 더 단순하고 따스한 답을 알려준 어떤 아주머니가 생각이 난다.

한국의 제주도로 10 개월 동안 유학을 갔었을 때 기숙사로 돌아가는 길에 같은 유학생인 언니와 마트에 가기로 했다. 당시 한국에 온 지 얼마 안 되었던 우리는 어디가 어디인지 몰랐고 제대로 장을 본 적이 없었다.

길을 찾는 도중에 우리는 어떤 공원에서 기분전환을 할 겸해서 운동을 하기로 했다. 운동기구를 어떻게 사용하는지도 모르고 돌아서 어색하게 운동을 하고 있는데, 어떤 아주머니가

“그렇게 하는 거 아니야. 나랑 바꿔봐.”

라고 말씀하셨다. 얼핏 차갑게 들리는 말투로 눈앞에서 거꾸로 매달려 있는 아주머니를 보면서 조금 당황해하고 있는데 “1분 재 줘라.”

라고 아주머니는 말씀하셨다. 언니가 타이머를 재는 동안 잠시 서먹한 시간이 흐른 뒤, 매달린 채

“어디 대학생이니?”

라고 물으셨다.

우리는 일본에서 온 유학생이라고, 아직 길을 잘 몰라 마트를 찾을 수가 없다는 등, 이야기를 나누는 사이에 1분이 지났다. 운동기구에서 내려온 아주머니는

“마트까지 가 줄게, 따라와.”

라고 말해 주셨다. 길을 못 찾아서 막막해하고 있던 우리는 그 한마디에 불안했던 마음이 아주 큰 고마움으로 바뀌었다. 그리고 그 마음을 더 크게 만든 것은 마트에 도착할 때까지의 아주머니의 말씀이었다.

“근처에 마트가 없다니 먹을 것 사기가 힘들겠다. 마트에 가면 많이 사고 건강하게 많이 먹어야 돼. 편의점 밥은 몸에 안 좋아.”

아주머니의 그 말씀은, 국적도 정치 문제도 상관없는, 단지 길을 잃은 젊은이에게 해주는 따스한 말이었다. 한국 사람들이 외국인인 나를 ‘일본 사람’ 으로 대할 거라고 생각했었던 나는, 그 순간 기쁘면서도 아주 신기한 느낌이 들었다.

한 사람의 따스한 말, 국적 상관없이 대하는 모습 등 아주 사소하지만 이것은 양국의 미래가 안고 있는 무겁고 복잡한 문제들에 있어서 한 줄기 희망의 빛이 되리라고 생각했다. 나는 이러한 아주 사소한 일들이 한일 미래로 이어지는 연장선이 되기를 바란다. 언어나 문화는 다르지만, 같은 마음을 가지고 있는 ‘사람’ 이라는 것을 잊지 않는 것, 오직 그것뿐이라고 생각한다. 그때 만난 아주머니처럼 말이다.

佳作

그리운 부산 할머니

森 方志 [千葉県]

1999년 여름이었다. 결혼하기 전에 아내의 가족을 만나러 부산에 갔다. 버스를 타고 경사진 길을 올라가는데 너무 흔들려서 무서웠다. 그렇지만 그것보다 더 무서웠던 건 장인, 장모와의 만남이었다.

“아이고, 어서 온나, 니가 마사시가?” 투박하고 큰 목소리로 반갑게 맞이해 주신 장인어른의 첫인사에 일단 마음이 놓였다. 방 안에는 장모님이 한상 가득 음식을 차려 놓고 기다리고 계셨다. 일본 사람이어서 싫어하면 어쩌나 걱정했는데 한숨 돌렸다.

식사를 하는데 장모님이 계속 내 손가락에 반찬을 올려 주셨다. 그리고 계속 “많이 먹어라” 고 하셨는데 거절하면 안 될 것 같아서 그냥 계속 주시는 대로 먹었다.

식사 후에 배가 너무 불러서 힘들어하는 나를 보시고는, 장모님께서 소화에 좋다고 물김치 국물을 마시라고 주셨다. 마셨더니 신기하게 속이 많이 편해졌다.

다음날, 근처에 사시는 할머니덕에 인사를 하러 갔다. 할머니 방에 들어가자마자 할머니께서 “나는 일본놈이라카면 징글징글하다. 일본놈 보고 싶지 않다” 고 하시면서 등을 돌리셨다. 나는 당황해서 아무 말도 할 수 없었다. 일단 할머니 방에서 나와서 아내가 할머니를 설득하기로 했다. 잠시 후에 할머니께서 불러서 방에 들어갔다. “내가 일본놈 때문에 진짜로 고생을 많이 해서 일본이 징글징글하다. 내 남편이 젊었을 때 강제로 일본에 끌려가서 몇 년을 고생했다. 다행히 안 죽고 살아서 왔는데, 너무 고생을 해서 정신이 미쳐버렸다. 그때부터 내 혼자서 애들 6명 키우고 미친 영감 돌보느라 죽을 고생을 했다 아이가. 니가 싫어서가 아니라 일본이 싫다. 내 사랑하는 손녀가 데리고 왔으니 니를 좋아하도록 노력해 볼란다.”

나는 대학에서 역사를 공부해서 한국과 일본의 역사에 대해서는 잘 알고 있었다. 그런데 실제로 피해를 당하신 할머니 이야기를 들으니까 마음이 아주 복잡해졌다. 지나간 역사를 되돌릴 수는 없다. 그렇다면 내가 할머니께 잘해서 일본의 이미지를 좋게 만들어야겠다고 다짐했다.

그 후로 2년간 서울에 사는 동안 할머니를 자주 찾아뵙고, 할머니의 이야기를 많이 들어드렸다. 갈 때마다 “아이구 우리 손녀 사위 왔나?” 라고 반갑게 맞이해 주셨다. 그리고 “마사시 때문에 내가 일본놈이란 말을 못 쓰겠다.” 라고 하셨을 때는 정말 기뻐다. 할머니는 지금은 이 세상 사람이 아니시지만, 가끔 할머니가 그림다.

最優秀賞

부산 돼지국밥의 세 얼굴 - 힐링, 헬스 그리고 컬처 -

弘川 幸乃 [大阪府]

김동리의 『밀다원 시대』의 주인공 이중구는 1951년 한국 전쟁 1·4 후퇴 때 만원 기차를 타고 부산으로 피란했다. 친구 집을 전전하면서 어찌다가 느끼는 편안함마저 죄책감과 고통으로 바뀐다.

나는 2022년 12월에 부산으로 여행하기 위해 따뜻한 바람이 나오는 KTX에 몸을 실었다. 호텔 방에서 느끼는 이 편안함은 몸과 마음마저 힐링이 되어 내가 노력해 온 것에 대한 대가를 받는 것 같았다. 참 행복하다.

이중구는 남한의 종착역인 부산이라는 곳이 낯설고 두렵다. 집 없는 떠돌이인 그에게 사막의 오아시스 같은 곳이 나타나는데 그곳이 바로 밀다원이라는 다방이다. 밀다원에서 만난 친구를 따라 빈대떡집을 찾는다. 한 잔의 술과 빈대떡은 잠 시나마 힐링이 돼준다. 빈대떡과 함께 피란민에 의해 만들어져 널리 알려진 당시의 힐링 푸드 중에는 그 유명한 돼지국밥도 있다.

돼지국밥하면 부산. 나는 부산에 갈 수 있어서 들떠 있었고 부산 방문의 최대 이유 중의 하나인 돼지국밥을 먹었다. 그 맛은 생각보다 담백했으며 각자의 취향대로 맛을 조절할 수 있는 점이 특히 마음에 들었다. 내가 맛본 음식 중에서 세 손가락에 들 정도로 끝내주게 맛있었다. 이렇게 맛있는 음식에 피란민의 애환이 담겨 있었다니……. 이것이 내가 김동리의 『밀다원 시대』를 읽고 조사하게 된 이유이기도 하다.

돼지국밥은 식당 창문 너머로 넘실거리는 파란 바다와 개성 있는 부산 사투리와 어우러져 그 맛을 더욱 깊게 한다. 장시간 끓여 만든 돼지국밥은 툭툭거리는 듯하지만, 사실은 따뜻한 식당 아주머니와 함께 조화를 이룬다. 70년 전의 이중구가 이런 부산 사람들에게 조금이나마 위로 받았다면 다행이다.

밀다원에서의 커피 한 잔과 담소, 빈대떡으로 허기를 채웠던 이중구. 시대가 달라 삶의 굴곡에도 차이가 있겠지만 시절을 열심히 살아가는 사람들에게는 공통점이 있다. 밀다원과 스타벅스. 장소와 분위기는 바뀌어도 지금의 우리도 커피 한 잔과 친구와의 대화와 따뜻한 밥 한 끼에 소소하지만, 큰 행복을 느낀다.

부산의 돼지국밥은 70년 전의 한국 전쟁 피란민들에게는 고달픈 하루를 지탱해 준 힐링 푸드였을 거다. 2030년 부산 세계 박람회를 개최하려고 노력 중인 부산 현지인에게는 하루의 힘이 되는 헬스 푸드이며, 나와 같은 관광객들에게는 부산을 상징하는 컬처 푸드이기도 하다. 2030년은 한국 전쟁 발발 80주년이 되는 해이다. 밀다원의 주인공들이 이것을 본다면 어떤 표정을 지을까?

優秀賞

부여 여행

秋山 由紀 [東京都]

햇님 씨가 없었다면 부여에 갈 생각을 못했을 것이다.

2년 전 코로나 19로 인해 한국에 갈 수 없는 상태가 지속되던 무렵 한국 책을 읽는 것에 빠져 있던 나는 문득 눈에 띈 에세이 '남편이 미워서 글을 쓰기 시작했다'를 읽기 시작했다. 그리고 그 책에 대해서 SNS에 올렸더니 그 책의 작가님 햇님 씨가 "제 첫 저서를 읽어 주셔서 감사합니다"라는 메시지를 보내 주었다. 그것이 그녀와의 교류의 시작이었고, 우리는 바로 친구가 되었다. 원래 서울에서 편집자로서 일하고 있던 그녀는 현재는 부여에 이사하고 1인 출판사를 차려 그곳에서의 생활과 일에 대해 SNS를 통해 알리고 있다. 그녀의 사진과 글을 통해 알 수 있는 백제의 마지막 도읍지인 부여의 풍경은 아주 흥미롭고 부여에 가서 햇님 씨를 만나고 싶어졌다.

코로나가 진정되어 해외여행이 가능해졌기 때문에 나는 올해 3월 서울 여행을 갔다. 그 여행중에 만약 햇님 씨를 만날 수 있다면 1박 2일로 부여에 가고 싶어서 햇님 씨에게 문자를 보내자 그녀도 나를 만나고 싶다고, 기다리고 있다고 답장을 주었다. 서울에서 고속버스를 타고 부여로 향했다. 부여 버스터미널에서 걸어다닐 수 있는 범위에 정림사지와 국립부여박물관이 있어서 둘러봤다. 그러나 역사의 유물들을 보면서도 나는 햇님 씨를 만나는 기쁨으로 가슴이 벅찼다. 드디어 햇님 씨와의 약속 시간이 되었고, 그녀가 추천하는 장소인 궁남지 옆 카페에서 우리는 만났다. 햇님 씨는 이미지 그대로 멋진 여성이었다. 우리는 많은 이야기를 나누면서 즐거운 시간을 보냈다.

부여에서 무엇보다 인상 깊었던 곳은 햇님 씨를 만난 다음날 간 부소산성이다. 660년 신라의 공격을 받았을 때 3000여 명의 백제 왕실의 공녀가 백마강에 투신했다는 낙화암이 유명하다. 꼭 그곳에 가서 거기서 보이는 경치가 어떤 것인지 제 눈으로 보고 싶었다. 2시간 정도의 트레킹 끝에 그 절벽에 당도했다. 그곳에서 조용한 백마강의 흐름을 보고 있더니 감동으로 눈물이 났다. 정말로 아름다운 경치였다. 꽤 멀리 왔구나 하는 생각과 동시에 '햇님씨 덕분에 여기까지 올 수 있었다'라는 감사의 마음으로 가득 찼다. 그날은 공교롭게도 제 생일이었기 때문에 그 경험은 최고의 생일 선물이 되었다.

부여 시민들의 휴식처인 궁남지는 연꽃으로 가득 찬 여름이 무척 아름답다고 한다. 이번에는 여름에 부여에 가고 연꽃이 가득한 궁남연못가를 햇님 씨와 수다를 떨며 걷고 싶다.

優秀賞

운주천무동

諫山 萌加 [駒澤大学]

2022년 여름, 안동으로 여행을 갔다. 세계유산으로 등재된 하회마을을 보러 가기 위해서였다. 나는 그 여행에서 운명적인 만남을 가졌다.

관광을 마치고 버스를 탈 때까지 시간이 있었던 나는 근처에 있는 민속박물관에 들르게 되었다. 1층의 전시를 다 보고 2층으로 가니 한 할아버지 한 분이 전시장 한편 책상 앞에 앉아 책을 읽고 있었다. 그는 나를 보자, “아가씨, 어디서 왔어요?” 라고 했다.

일본에서 왔다고 대답하자 놀랍게도 그는 유창한 일본어로 본인은 서예가이며 여기서 본인의 작품을 팔고 있다고 말했다. 너무나도 자연스러운 일본어에 무심코 나는 그에게 일본분이시냐고 물었다. 하지만 그는 “난 지금 91살이고…” 라고 운을 뚫다.

아차, 그 순간 큰일을 저질렀다고 생각했다.

“14살까지 나는 일본인이었던다.”

충격이었다. 어떤 말을 해야 할지. 일본인인 내가 그의 앞에 서 있어도 되는지, 그의 기분을 상하게 하지 않는지, 그것만이 걱정이었다. 나는 무의식적으로

“...죄송합니다.”

라고 한마디 했다. 어색한 나머지 얼른 자리를 떠나려 할 때,

“왜 미안해하는데?”

그는 말했다.

“잠깐. 아가씨에게 좋은 걸 줄게.”

그렇게 말하곤 붓을 들고 글씨를 쓰기 시작했다.

“雲走天無動”

운주천무동 - 구름이 흘러가도 하늘은 움직임이 없다. 주변이 아무리 변화한다고 해도 본질은 변하지 않는다.

나는 머뭇머뭇 그에게 물어보았다.

“일본을 미워하지 않으신가요?”

“설마. 14살까지 나에게 일본어를 가르쳐 준 사람은 요시다라는 남자였다. 지금도 잘 기억하고 있어. 요시다는 우리에게 아주 잘해 줬어. 요시다 덕분에 나는 일본인을 미워한 적도 없고.”

“일본과 한국은 사이 좋게 지내야 돼. 그건 내가 잘 알아. 왜냐하면 우리는 옆집이니까.”

Y님, 들리시나요?

Y님 덕분에 한국과 일본이 실제로 더 친해졌으면 좋겠다고, 앞으로 한일 친선에 관련된 일을 하고 싶다고 생각하게 되었습니다. 그런 생각으로 진심이 담긴 말을 정확하게 전달하는 경험을 쌓고자 통역 봉사도 시작했습니다.

장래에 어떻게 한일 친선에 공헌할 수 있는지에 대해서는 솔직히 아직도 고민 중입니다. 그러나 운주천무동 - 구름이 흘러가도 하늘은 움직임이 없듯이 앞으로 아무리 주변 환경이 바뀌든 제 신조는 변하지 않습니다. 그날 저에게 용기를 주신 Y님께 감사하는 마음으로 힘껏 노력하겠습니다. 힘든 환경에서도 이웃을 사랑하는 마음만은 변치 않았던 안동의 한 신사처럼.

佳作

‘포스트 코로나’ 여행에서 발견한 기쁨

渡辺 由美子 [東京都]

길고 어두웠던 터널을 빠져나와, 올해 드디어 해외여행을 갈 수 있었다. 여행지로 한국을 선택하고 떠났는데, 예기치 못한 기쁨이 나를 기다리고 있었다.

나의 취미는 여행이지만, 전 세계를 떨게 했던 작은 바이러스 때문에 3년 이상 거의 집에 틀어박혀 살았다. 한국어 수업도 온라인으로 바뀌어 집에서 들을 수밖에 없었다. 언제 다시 한국어를 실제로 사용할 수 있을지 모르는 채로.

오랜만에 방문한 서울은 예전처럼 활기를 되찾은 듯 보였다. 그러나 내가 좋아했던 맛집과 쇼핑하러 갔던 명동의 가게들 몇몇은 아쉽게도 없어졌다.

변화는 나에게도 있었다. 놀랍게도 한국 사람들과 한국어로 길게 대화할 수 있게 된 것이다.

한국에 도착한 날 나는 연세대 대학원생인 은지 씨를 만나 캠퍼스 안내를 받았다. 우리는 애오개로 넘어가 간장계장을 먹고, 익선동의 멋진 카페에서 디저트도 즐겼다. 그 여섯 시간 동안 우리는 거의 한국어로 재미있게 수다를 떨고 있었다. 한국어가 서투른 내가? 정말 가슴 뛰는 경험이었다.

“지금 우리가 한국어로 이야기하고 있는 게, 신기하네요.” 라고 내가 놀라워하자, 은지 씨가 “어? 전에는 어느 나라말로 이야기했었죠?” 라고 물었다. 은지 씨는 내가 예전에 베이징에서 초급 일본어를 가르쳤을 때의 학생이다. 우리는 몇 년 전에도 서울에서 만났었는데 그때는 나의 한국어가 서투러 영어와 중국어, 일본어, 한국어를 비빔밥처럼 섞어서 이야기했었다.

그런데 이번에는 연애 이야기 등 “걸스 토크” 까지 한국어로 하고 있지 않은가! 나의 한국어는 완벽과는 거리가 멀지만 꾸준히 한국어를 배워 온 보람을 느낀 순간이었다.

다음에는 함께 강원도에 가서 회를 먹자는 말을 뒤로하고 우리는 헤어졌다.

그러나 이 여행 기간 나의 한국어가 언제나 잘 통한 것은 아니었다.

버스를 타고 기사님에게 “경복궁에 가요?” 라고 물어봤는데 “네? 어디요?” 라고 하며 전혀 알아듣지 못하는 것이었다. 나는 당황해서 “경복~궁! 경복~궁!” 이라고 말했지만 여전히 안 됐다. 그때 뒤에 앉은 친절할 승객이 벌떡 일어나 “경~복궁” 이라고 말해 주어 해결했지만, 정말 부끄럽고 충격적인 경험이었다. 수년간 한국어를 배웠는데? 이렇게 간단한 단어도 통하지 않다니. 역시 나의 발음에 문제가 있는 건가?

여행을 마치고 나는 일본으로 돌아와 다시금 대면 수업으로 바뀐 한국어 강좌를 듣고 있다. 이제는 언제든지 갈수 있게 된 한국 여행을 또 기대하며.

佳作

300 번 고마워요

齊 智司 [埼玉県]

“고마워요”

여행 중 이 말을 적어도 300 번은 한 것 같다.

이번 한국 여행은 가족여행. 예전부터 아이들과 함께 한국에 가고 싶어 큰맘 먹고 7 월말부터 2 주 정도 휴가를 냈다. 계획은 5 월부터 세우고 있었다. 친구에게 한국에 간다고 말을 하자 “성수기잖아! 호텔비가 아깝다! 우리 집으로 오라”고 가족 모두를 받아줬다. 생각해보면 이것이 “고마워” 의 시작이었다.

공항에 도착하자마자 청소를 하던 아주머니가 우리 애들에게 “귀엽다” 며 “웰컴 투 코리아” 라고 말해줬다. “고마워” 는 이번이 두 번째. 여기서 어떻게 300 회에 도달할 수 있는지 궁금증을 풀어보자.

답은 전철.

친구 집은 인천. 인천서 명동, 강남까지는 여러 번 환승이 필요하고 시간도 1 시간 이상 걸린다. 아내가 아들을 업고 전철에 오르자 어느 날은 멀리서 아주머니가 여기 앉으라고 손을 뿜뿜 흔들고 외치면서 자리를 비워주었다. 또 어떤 날은 짝찬 노약자석에 계시던 이름 모를 아저씨 세 분이 아들과 딸을 쪼그리고 앉혀 주었다.

또 어느 날은 “전철이 스쳐갔다” 며 눈을 반짝이며 창밖을 보는 아들의 발이 옆 아저씨에게 부딪히고 말했다. “앞을 향해” 라고 주의를 주자 아저씨는 “괜찮다” 라고 하시며 “건강해서 좋다” 며 아들의 머리를 쓰다듬어줬다. 아들이 기뻐하며 발버둥치는 바람에 아저씨의 무릎에 딱딱 발이 닿았지만 신경쓰는 기색도 없었다. 아이를 동반한 한국 여행에서 한국인의 아이에 대한 상냥함과 도량의 크기를 알게 되었고 나도 일본으로 돌아가면 그 아저씨처럼 마음에 여유가 있는 남자가 되어야겠다고 생각했다.

점차 애들도 한국에 마음을 열어갔다. 여행 초기에는 전철을 타도 불안하게 굳어 있었는데 너무 매번 자리를 양보해 주니 아이들이 작은 소리로 “감사합니다” 라고 한국어로 말하게 됐다. 또 아내도 일본에서는 자리를 양보받은 기억이 별로 없는 듯 자리를 양보받을 때마다 감동해서 “감사합니다” 라고 머리를 숙였다. 더욱이 아내가 기뻐던 것은 또 하나. 전철 안에서 아줌마들이 “힘든 시기지만 힘내라, 지금이 귀여울 때다, 대단하다” 며 아내에게 응원을 보내준 것이다.

“나도 일본가서 저런 아줌마가 되고 싶어” 라고 아내가 말했다.

이번 한국 여행은 목적지보다 목적지로 향하는 전철 안에서 드라마가 있었다. 많은 “고마워” 를 신고 전철은 달리고 인천에 도착하면 매번 친구가 데리러 와줘서 행복했다.

300 번의 감사가 넘친 최고의 12 일간. 이 여행을 우리 가족은 평생 잊지 못할 거다.

佳作

내가 부산을 사랑하는 이유

永田 伶衣 [大阪府]

나는 한국에서도 부산을 특별히 사랑한다.
물론 바다도 좋고 해산물도 좋지만 그것들은 이유가 아니다.
자꾸 가까이하고 싶고 또 닮고 싶은 사람들과의 인연이 나를 부산을 사랑하게 만들었다.

그런 인연을 접할 수 있는 곳이 있다.
바로 보수동책방골목이다.
매력적인 곳이지만 여기를 찾아가는 사람은 드물 것이다.
여기는 헌책방들이 모여 있는 곳이고 책이 무작정 쌓여 있는 모습은 예술작품같이 아주 멋지다.
남포동 쪽에 위치하고 있으며 아침에 토스트를 먹고 배를 채운 다음 커피를 한 손에 들면서 산책할 겸 걸어가서 구경하는 것을 추천한다.
하지만 남포역에서는 도보로 30 분 가까이 소요되니 갈 때나 올 때는 버스를 타고 편하게 가는 것도 괜찮다.
영업시간은 골목길에 나와계셨던 할머니께 여쭙어보았더니 오전 11 시를 넘어야 연다고 하셨다.
10 시에 갔을 때는 문이 다 닫아 있었지만 11 시를 넘어서 다시 갔더니 가게 문이 거의 다 열려 있었다.
서점을 좋아하고 특히 여행지에서 서점을 꼭 들리는 사람이라면 무조건 가봤으면 좋겠다.
새책은 나부터 읽기 시작되는 매력이 있지만 누군가의 역사가 스며든 헌책도 또 다른 매력이다.

책방 앞에는 책이 흘러나왔듯이 많은 책들이 보인다.
분명히 정리가 안 되어 있는 것 같아 보이지만 주인아저씨는 정확히 파악하고 계신다.
어떤 손님이 사진을 보여주면서 “혹시 이 책 있나요?” 질문에는 순식간에 인터넷 검색을 한 것 마냥 바로 대답하셨다.
카리스마 넘치는 모습이었다.
책들은 대중 서점이 아닌 헌책방이라 하나하나가 마치 여행하면서 만나는 인연과 비슷하게 운명처럼 느껴졌다.
그리고 대중 서점에서는 흔히 받지 못할 서비스를 받았다.
찾는 책이 있다면 다른 가게 재고까지 확인해 주며 찾아주시고 또 나의 책 취향을 고려해서 책 추천도 해주셨다.
그리고 그 책 내용이 정말 괜찮은지 목차를 하나씩 소리 내 읽으면서 꼼꼼히 체크까지 해주셨다.

초면이지만 오래 알고 지낸 것 같이 든든하고 행복한 시간을 선물 받았다.
결국 책방에는 1 시간 반이나 있었고 나는 무려 10 권 책을 들고 7 일간 한국여행을 하였다가 일본으로 오게 되었다.
책 10 권이 정말 소중한지만 그 보다 주인아저씨와 대화를 나눴던 추억이 더 나를 행복하게 만들어 준다.

무언가를 볼 때 무엇을 또는 누구를 통해서 보는지에 따라 보이는 것이 달라진다.
그래서 많은 인연들을 반가워하며 또 소중히 아껴서 앞으로도 아름다운 한국을 많이 보고 싶다.

佳作

‘엄마가 달라졌다!’ 그 이유는?

中村 慧 [長崎県]

한국 드라마를 좋아하는 나는 옛날 드라마도 즐겨 본다. 2008년, 한국에서 인기를 끌었던 “엄마가 뿔났다”는 주부의 '일탈'을 그리며 많은 한국의 어머니에게 대리만족을 느끼게 했다. 우리 엄마도 소위 일탈을 꿈꾸며 내가 유학 중인 한국을 찾았다. 이런 엄마지만 한국에 대해서 좋은 이미지를 갖고 있지는 않았다. 그렇지만 이번의 일탈은 전화위복의 계기가 된다. 한국을 직접 겪은 엄마가 달라진 이유를 몇 가지만 엄선해 보겠다.

에피소드 1; 엄마 왈, “한국분들은 배려심이 많고 친절하구나!”
공항에서 지하철을 타려고 내려가려는데 엘리베이터가 보이지 않아 곤란해하고 있었다. 그때 한 중년 남성이 짐을 들어줬는데 일본에서는 좀처럼 경험할 수 없는 것이라 엄마가 참 기뻐하셨다

에피소드 2; 엄마 왈, “일본어로 말 걸어 주는 분들이 많구나.”
시장, 식당, 백화점, 지하철, 장소를 가리지 않고 일본어로 말을 걸어 주는 시민들이 많았다. 엄마는 반일 감정이 있는 한국 사람들이 왜 이렇게 일본어를 잘하고 관심이 많냐며 놀라셨다.

에피소드 3; 엄마 왈, “모든 것이 다 큼직큼직하고 사람들이 밝구나!”
한국을 직접 보기 전에는 엄마는 늘 이렇게 말씀하셨다. “역시 일본이 더 선진국이야” 하지만 서울 거리를 걷던 엄마는 건물 하나하나가 멋스럽고 선진국인 느낌이라고 했다. 카페며 자동차며 사람들, 다 큼직큼직하고 사람들이 즐거워 보여 좋다고 했다.

에피소드 4; 엄마 왈, “음식 양념이 나에게 안성맞춤이구나!”
일본 식당은 아주 약간의 밑반찬이 오는데 한국은 엄청난 양과 밑반찬 등이 밥과 함께 나온다는 것에 놀랐다. 최근에는 손님이 직접 떠다 먹는 셀프서비스도 많아졌다. 엄마는 서비스가 일본과는 달라 신선해 보였다고 한다. 한식은 사람의 건강을 생각한 양념으로 딱 엄마의 취향이라고 했다. 엄마는 식당마다 김치 맛이 다르다는 것도 놀라웠고 감칠맛이 나서 팔도의 김치를 먹어 보고 싶다고 했다.

에피소드 5; 엄마 왈, “부산이나 다른 지역에도 꼭 가 보고 싶구나!”
엄마는 이번 한국 여행에서 많은 것을 배웠고 선입견은 버려야 한다는 것을 배울 수 있었다고 했다. 엄마가 딸의 유학을 계기로 한국 문화를 존중하게 되었다. 엄마의 일탈로 시작된 여행은 엄마를 달라지게 했다. 역시 ‘백문불여일견’ ‘백 번 듣는 것이 한 번 보는 것만 못하다’ 엄마의 일탈은 엄마가 뿔났다의 김혜자 배우님처럼 대성공이었다. 나의 엄마가 달라졌다.

日本語川柳・俳句部門 **最優秀賞**

村田 睦美〔埼玉県〕

時を超え 蓮の花咲く プヨの池

日本語川柳・俳句部門 **優秀賞**

大川 ことの〔新潟大学〕

風磬の 音の波間を 泳ぐフナ

谷川 彩恵〔筑波大学〕

韓ドラで 同志に変わる 親子かな

佳作

福田 友理〔東京女子大学〕

猛暑日の 今日も癒しの コンダクス

李 承炫〔韓国 京畿道〕

愛想無い 接客に感じる 懐かしさ

北森 大基〔奈良県〕

韓流を 流し見育児 二刀流

井上 英治〔東京都〕

南山と 常盤の松の 翠(みどり) 萌ゆ

最優秀賞

南口 江美 [東京都]

나랑 사귄래? 드라마의 대사에 꼬덕이는 나

優秀賞

中島 理帆 [電氣通信大学]

눈높이 올려 자막 없이 보려는 한류 드라마

草野 洋子 [千葉県]

여름 소나기 물이 새는 윈도우막 덧없는 사랑

佳作

湯澤 葉子 [東京都]

동백아 나랑 바다에서 놀자고 우는 갈매기

高橋 乃愛 [新潟大学]

“ 여기 카페네 . ” 10 미터 걸으면 “ 여기도 카페 ! ”

檜原 結海 [京都国際高等学校]

4 교시 수업 꼬르륵 소리 나서 숨기고 싶어

藤野 美保子 [神奈川県]

많은 밀반찬 냉장고 안에 담긴 엄마의 사랑



駐日韓国文化院

www.koreanculture.jp

駐大阪韓国文化院

www.k-culture.jp